

2.2.9 付着生物（動物）

付着生物（動物）調査については、令和6年5月27日、28日（春季調査）、令和6年8月7日、8日（夏季調査）、令和6年11月19日、20日（秋季調査）、令和7年1月20、21日（冬季調査）に実施した。調査地点は、図2.1.1(1)に示したとおりである。

(1) 調査地点の基質及び状況

調査地点は苅田沖土砂処分場の西護岸中央部にSt. A、南東角にSt. B、新門司沖土砂処分場の北護岸にSt. D、西護岸北側にSt. Eが設置されている。

基質は、St. Aがコンクリート製の方塊部と深所は被覆石部からなり、St. Bが消波ブロック部と被覆石部からなる。いずれの調査地点も水深3.0m前後から浮泥の堆積が目立ち、深所へいくに従って堆積範囲が広がっている。St. Dは消波ブロック部と被覆石部からなり、St. Eは観察範囲の全体が被覆石部からなる。

(2) 調査結果

坪刈りによる主な付着生物（動物）の季節別出現状況を表2.2.11、季節変化を図2.2.35、水平分布を図2.2.36に示す。

各季の総出現種類数は、197～232種類の範囲にあり、冬季に最も多く、秋季に少ない傾向であるが季節による差は小さかった。

地点別平均出現個体数は、1,170～6,240個体/0.1㎡×3層の範囲にあり、春季に最も多く、秋季に少ない傾向であった。

個体数からみた主な出現種は、春季は節足動物門のトゲワレカラとイワフジツボ、夏季及び秋季にイワフジツボであった。冬季は組成比率が10%以上の優占種はみられなかった。

地点別平均湿重量は、400.9～549.5g/0.1㎡×3層の範囲にあり、冬季に最も多く、夏季に少ない傾向であるが季節による差は小さかった。

湿重量からみた主な出現種は、いずれの季節も軟体動物門のケガキであり、その組成比率は69.6～86.8%と高かった。

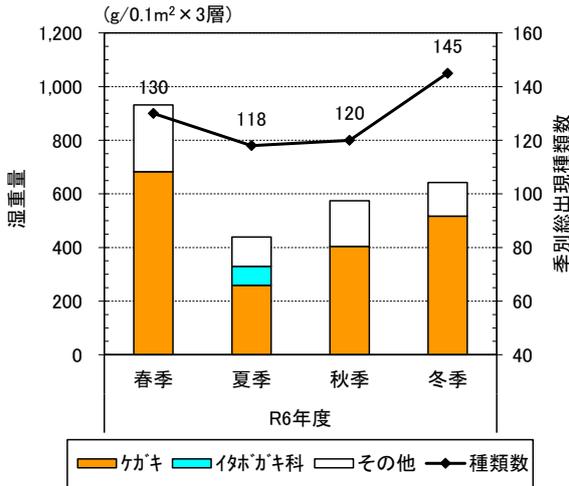
水平分布をみると、種類数は調査地点で大きな差がないが、空港島の南側に位置するSt. Bと北西側に位置するSt. Eの秋季では種類数が少なかった。湿重量からみた優占種はSt. Eでは節足動物門のカメノテであったが、他の3地点ではケガキであった。

表 2.2.11 付着生物（動物）観察結果の季節別出現状況

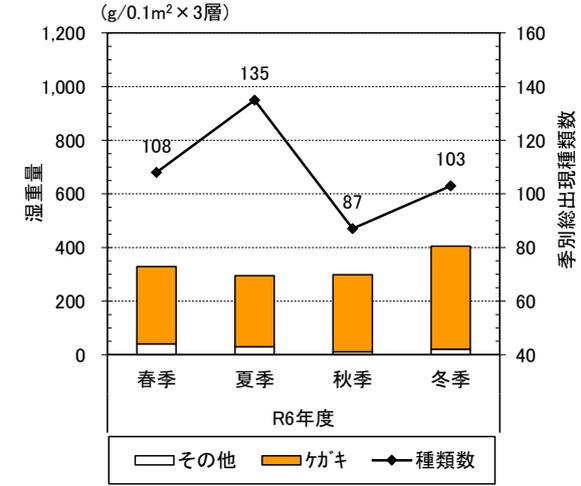
項目／調査時期	令和6年5月27, 28日 (春季：4点)	令和6年8月7, 8日 (夏季：4点)	令和6年11月19, 20日 (秋季：4点)	令和7年1月20, 21日 (冬季：4点)
総出現種類数	212	220	197	232
地点別平均種類数 3層合計（範囲）	115 (108 ~ 130)	121 (106 ~ 135)	102 (81 ~ 121)	124 (103 ~ 145)
地点別平均個体数 3層合計（範囲）	6,240 (3,036 ~ 11,338)	2,948 (1,278 ~ 3,900)	1,170 (654 ~ 2,037)	2,077 (830 ~ 3,242)
個体数	環形動物門 4.5	10.6	12.9	12.2
組成比	軟体動物門 11.5	32.0	45.5	25.8
(%)	節足動物門 82.8	53.9	37.3	57.6
	その他 1.2	3.5	4.3	4.4
地点別平均湿重量 (3層合計) (範囲:g/0.1m ² ×3層)	512.1 (103.9 ~ 931.3)	400.9 (176.2 ~ 693.8)	466.0 (162.4 ~ 828.3)	549.5 (99.3 ~ 1,050.6)
湿重量	環形動物門 0.7	0.7	0.2	0.4
組成比	軟体動物門 89.2	84.6	87.3	89.8
(%)	節足動物門 4.9	12.4	9.4	5.2
	その他 5.2	2.3	3.1	4.6
主な出現種と その平均個体数 (個体/0.1m ² ×3層) ()内は組成比率(%)	トゲワレカラ 576 (27.7) イワフジツボ 466 (22.4)	イワフジツボ 326 (33.2)	イワフジツボ 75 (19.3)	優占種なし
主な出現種と その平均湿重量 (g/0.1m ² ×3層) ()内は組成比率(%)	ケガキ 133.78 (78.4)	ケガキ 93.04 (69.6)	ケガキ 124.0 (82.2)	ケガキ 154.45 (86.8)

注) 主な出現種は平均出現個体数、平均出現湿重量の上位5種（但し組成比率が10%以上）を示す。

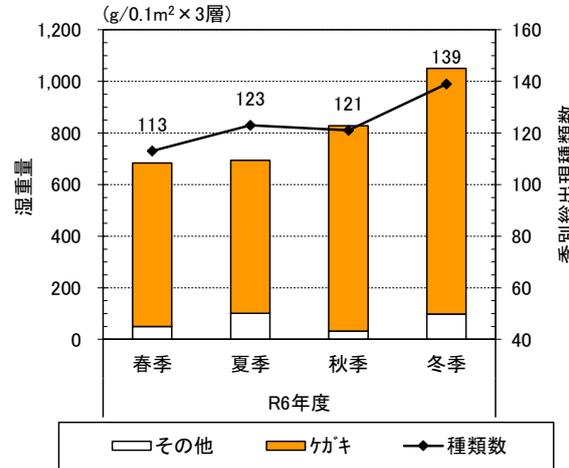
【St.A】



【St.B】



【St.D】



【St.E】

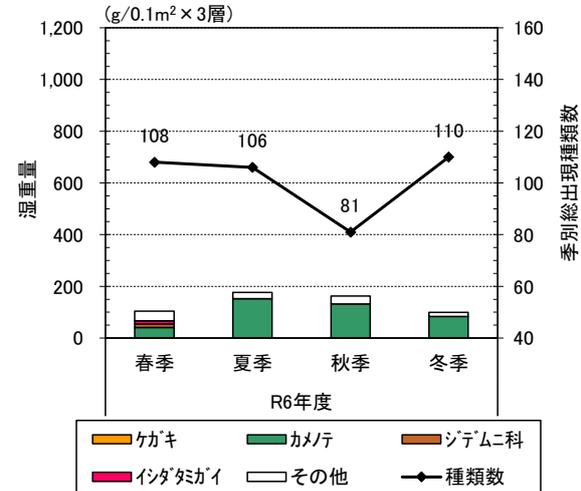


図 2.2.35 付着生物（動物）の季節変化（調査地点別）

調査期日：令和 6年 5月27日～28日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

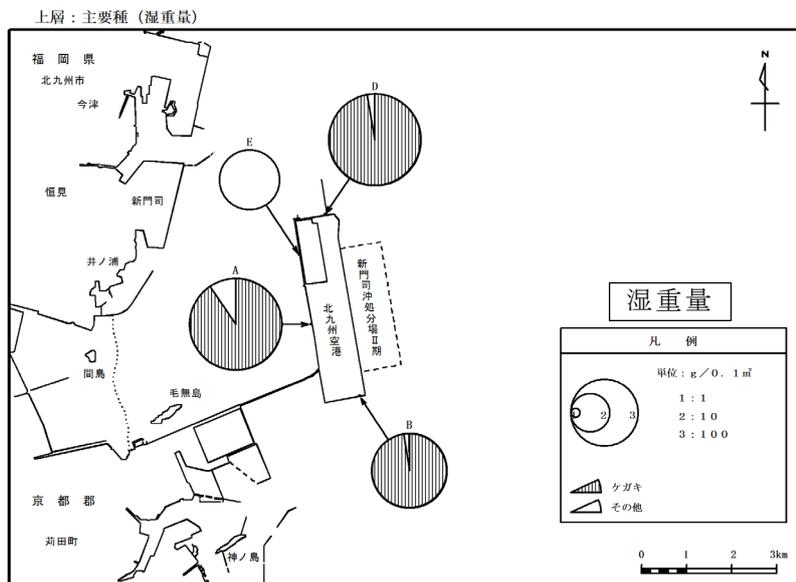
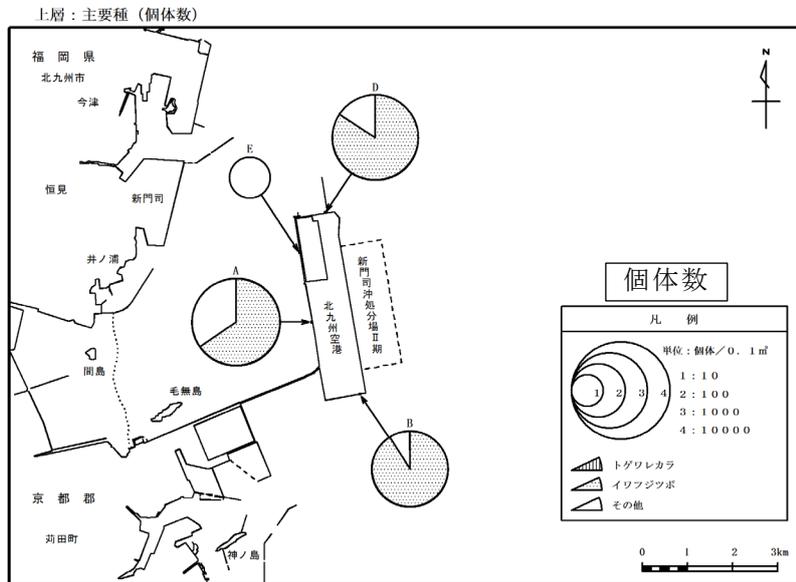
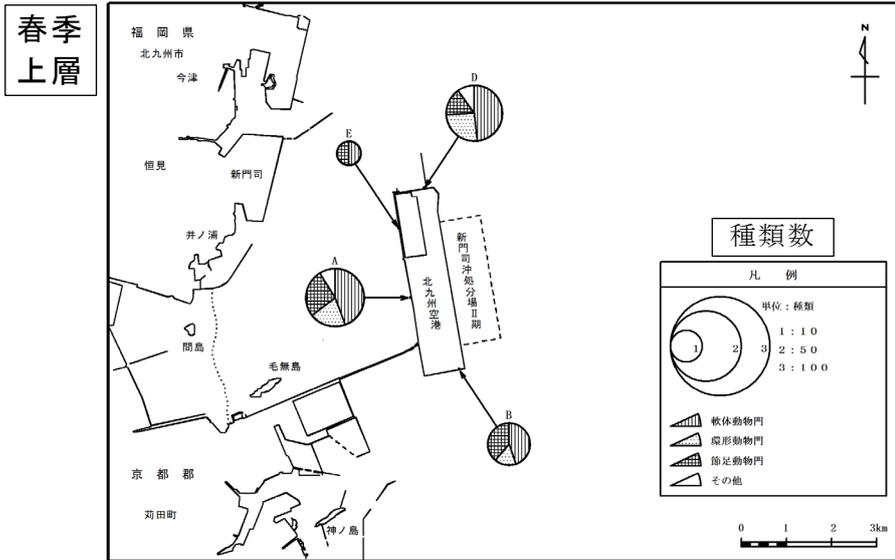


図 2.2.36(1) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度春季・上層）

調査期日：令和 6年 5月 27日～28日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

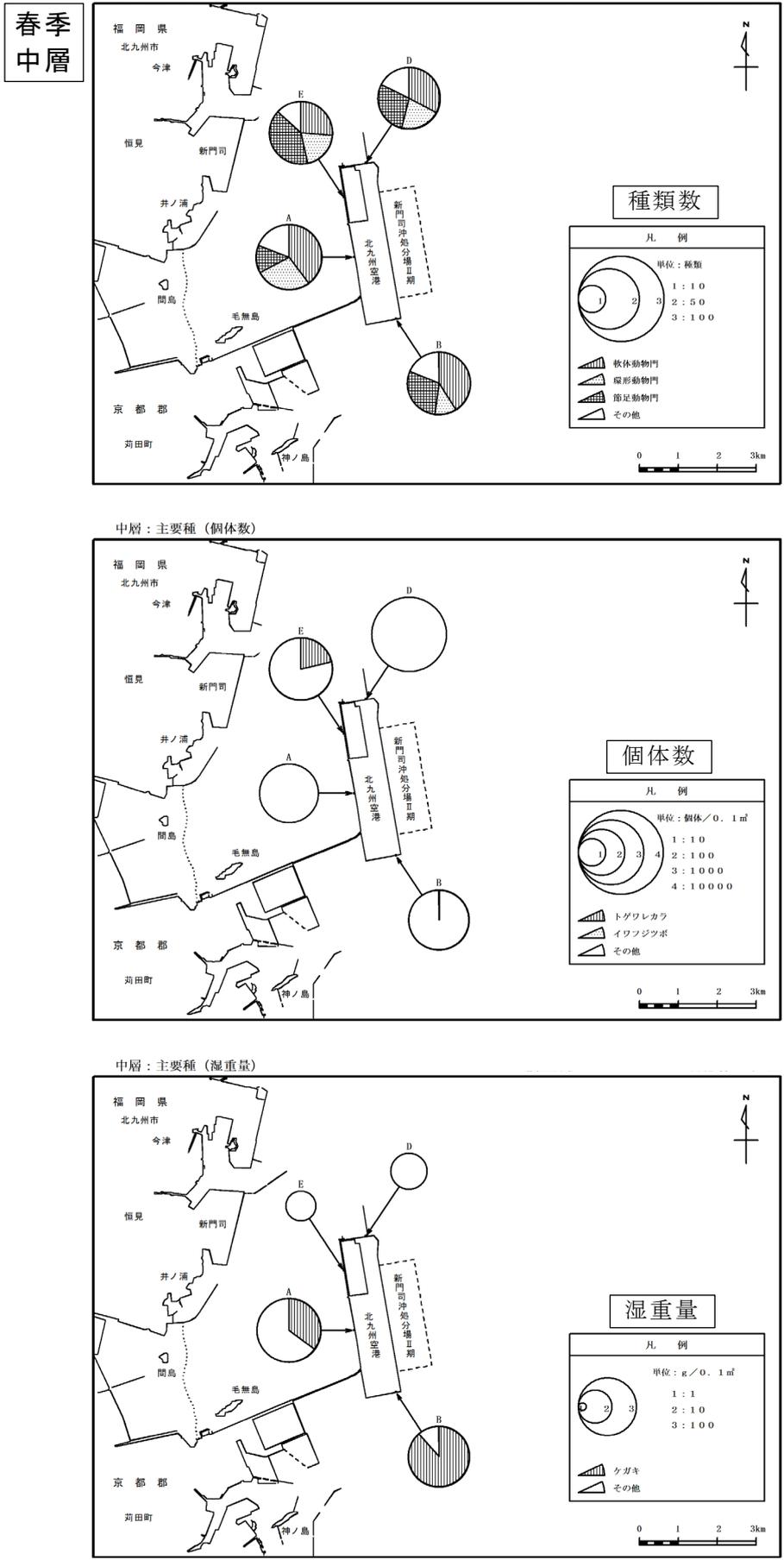


図 2.2.36(2) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度春季・中層）

調査期日：令和 6年 5月 27日～28日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

春季
下層

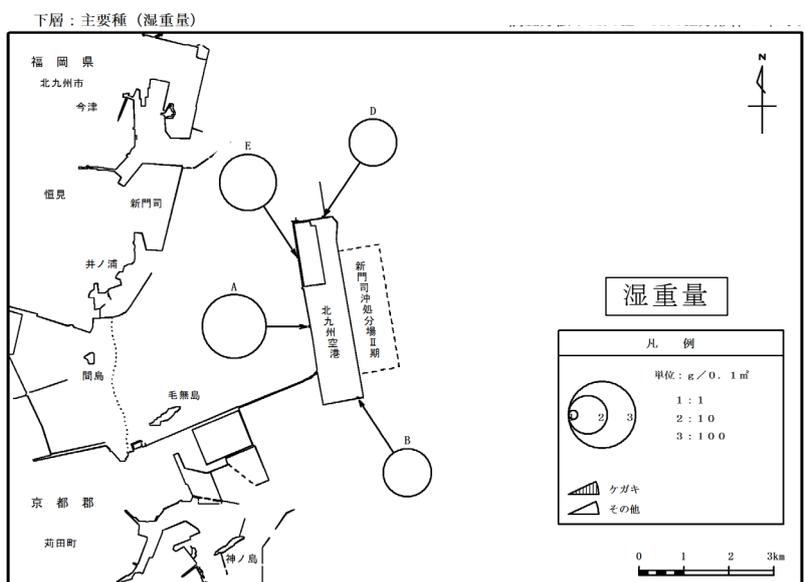
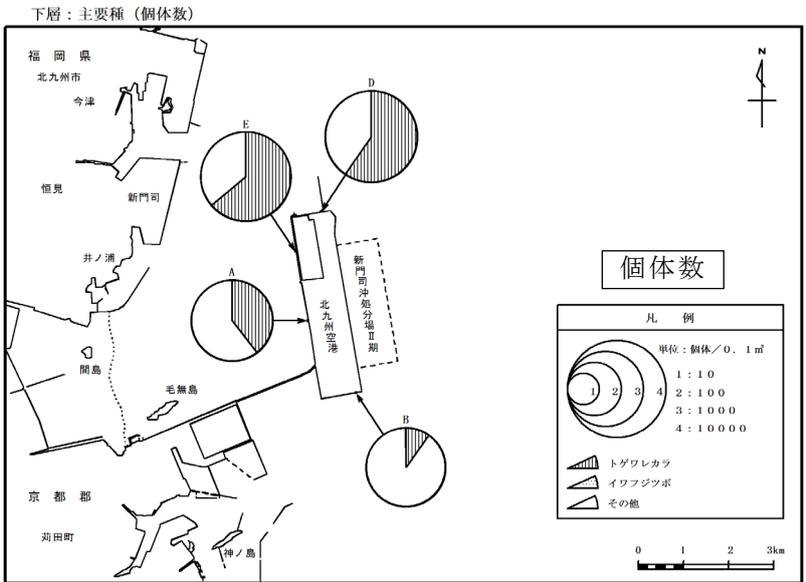
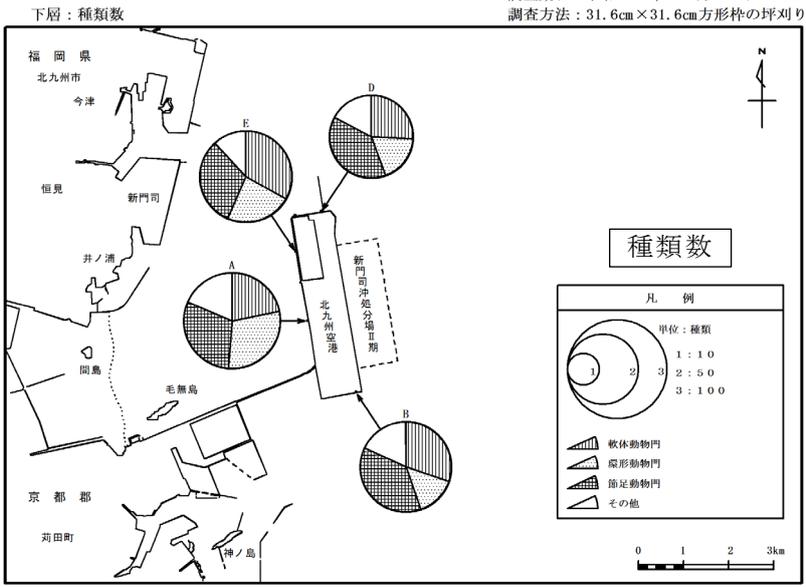


図 2.2.36(3) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度春季・下層）

調査期日：令和 6 年 8 月 7 日～ 8 日
 調査方法：31.6cm×31.6cm 方形枠の坪刈り

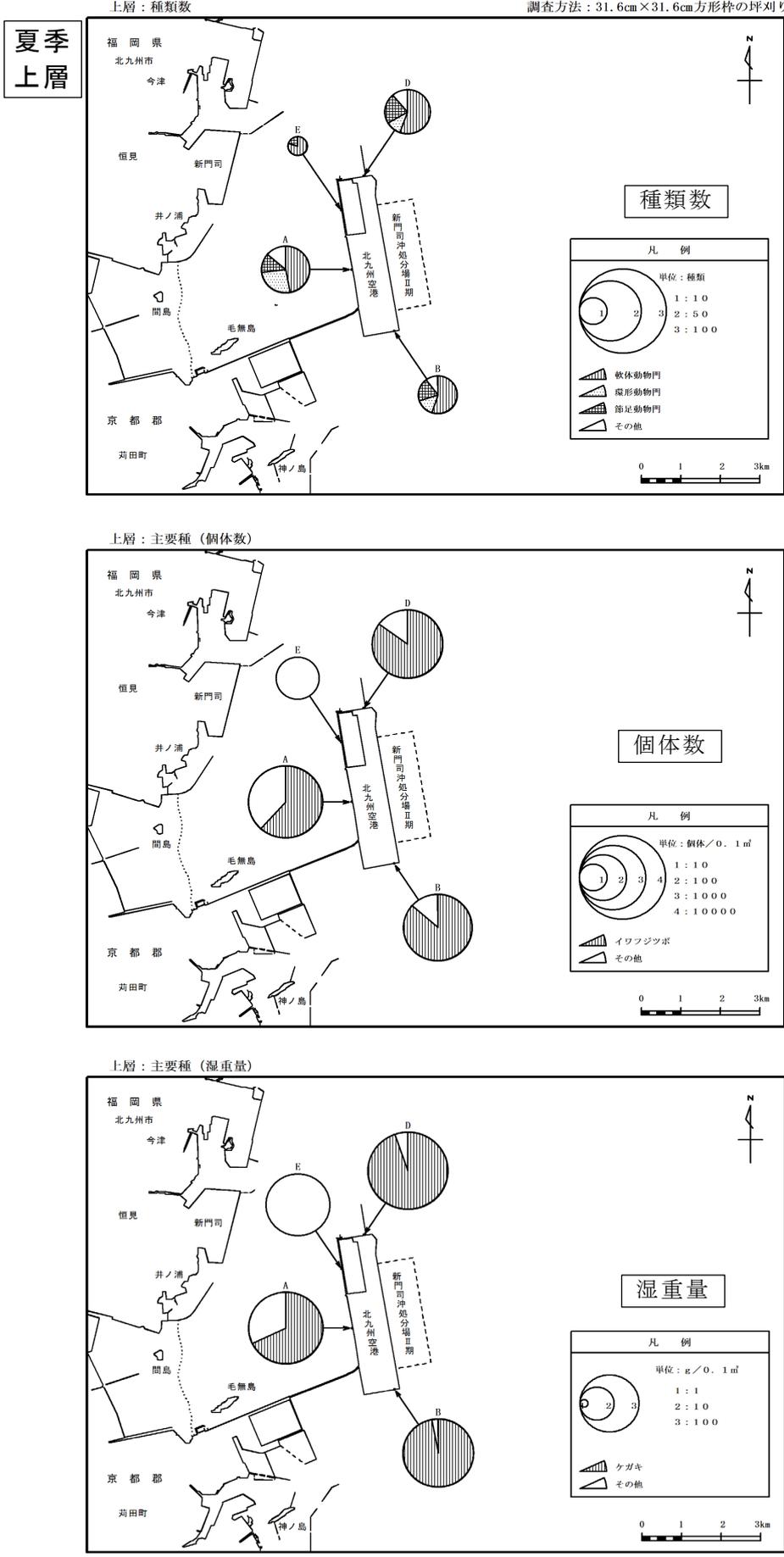


図 2.2.36(4) 付着生物（動物）の水平分布（令和 6 年度夏季・上層）

調査期日：令和 6年 8月 7日～ 8日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の採刈り

夏季
 中層

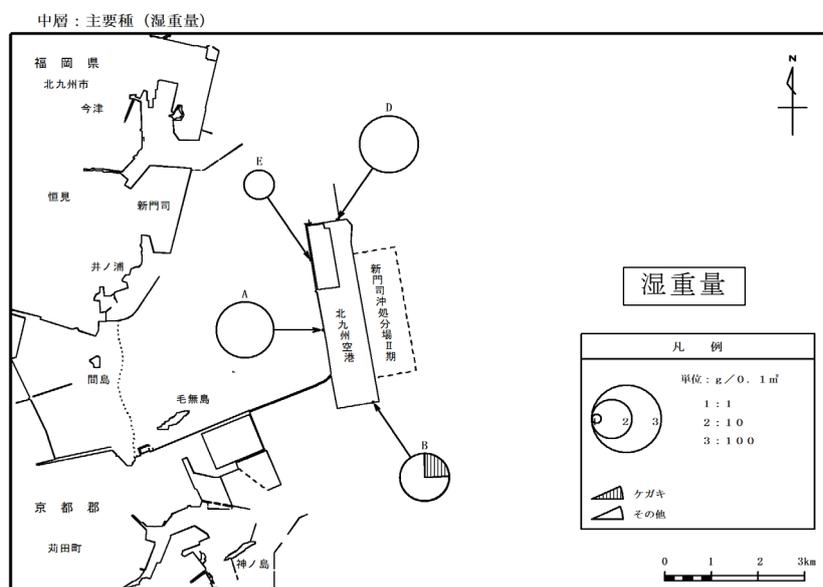
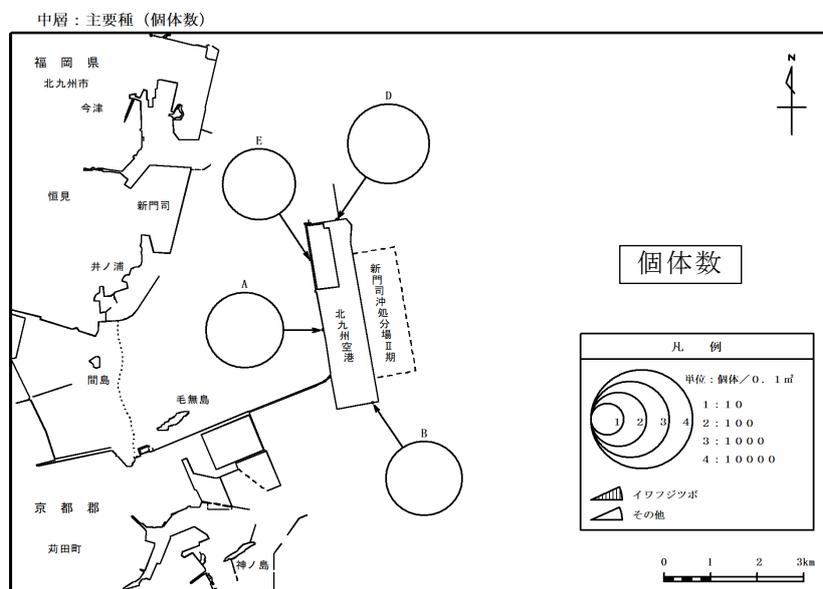
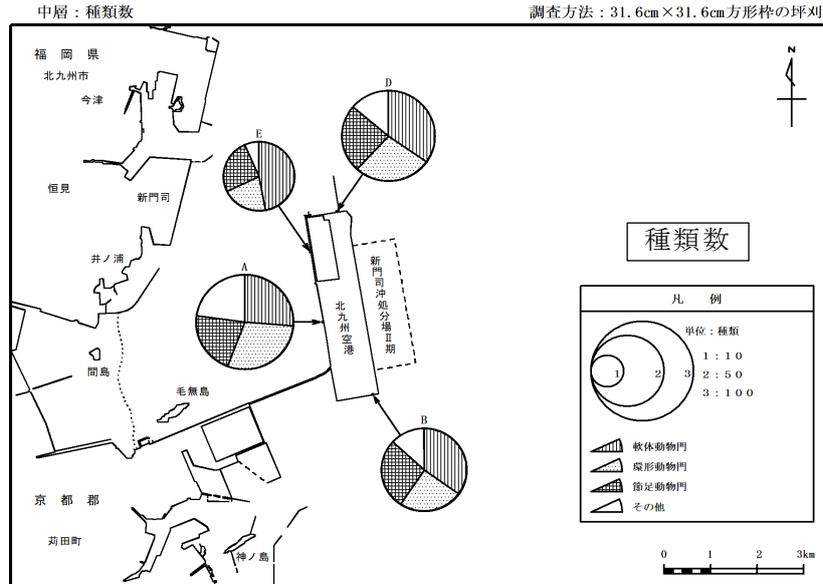


図 2.2.36(5) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度夏季・中層）

調査期日：令和 6年 8月 7日～ 8日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪列り

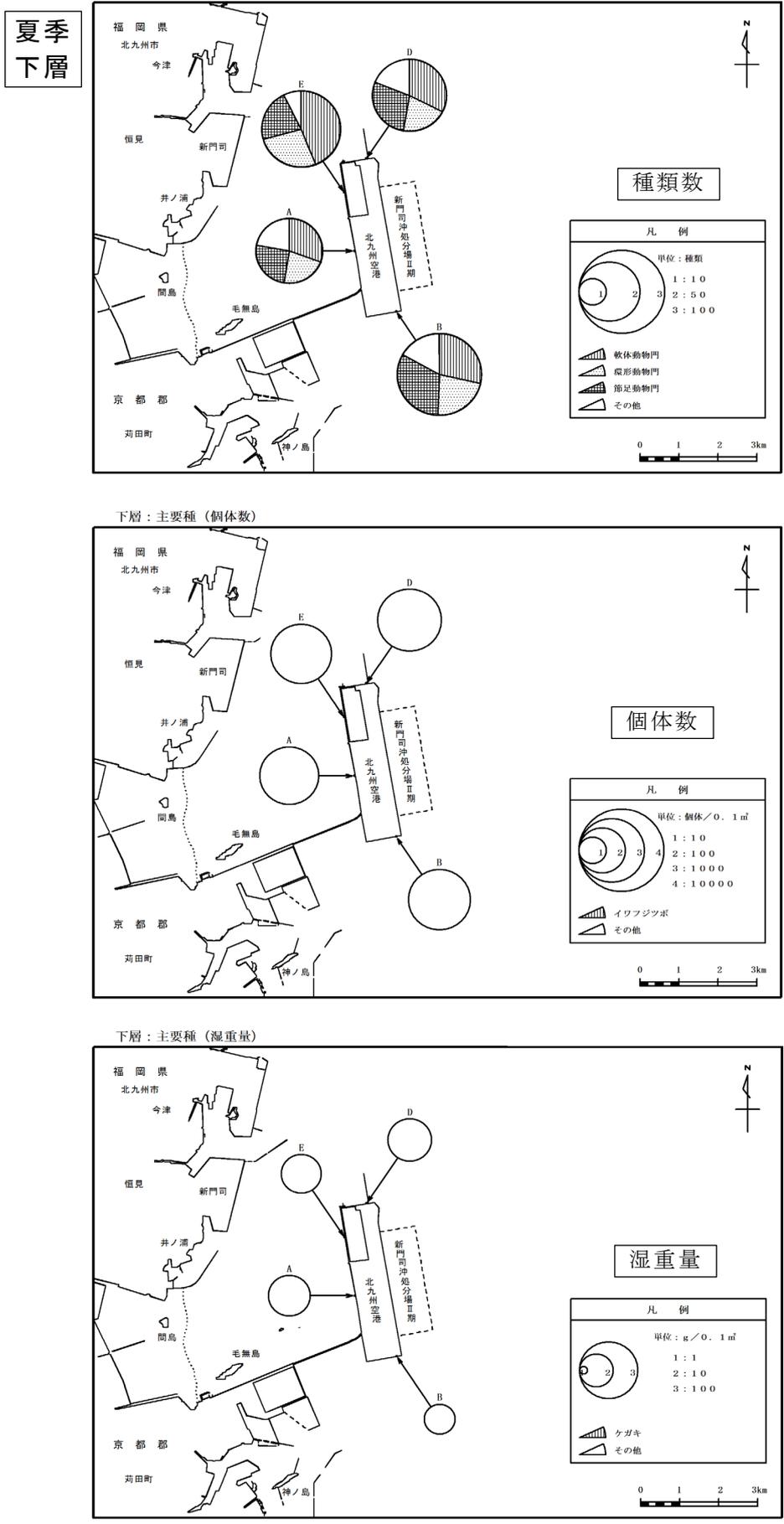


図 2.2.36(6) 付着生物（動物）の水平分布（令和 6 年度夏季・下層）

調査期日：令和 6年11月19日～20日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の採り

秋季
 上層

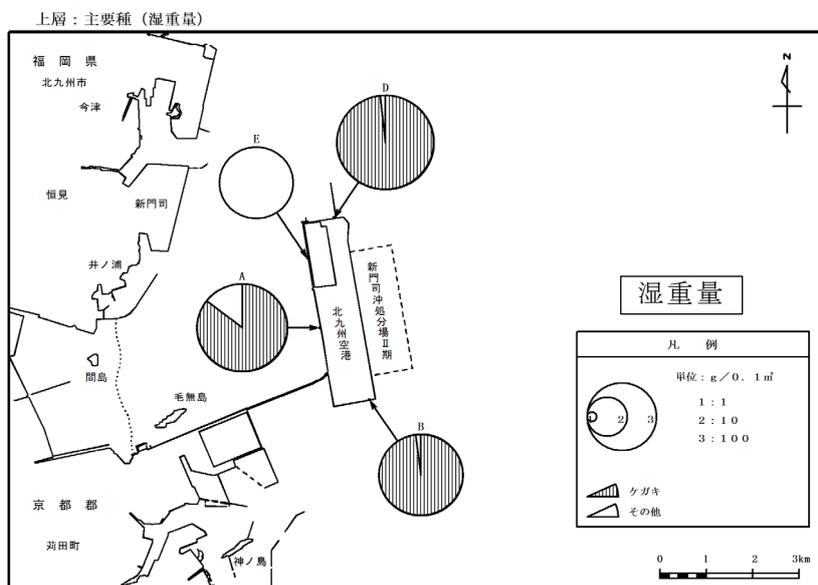
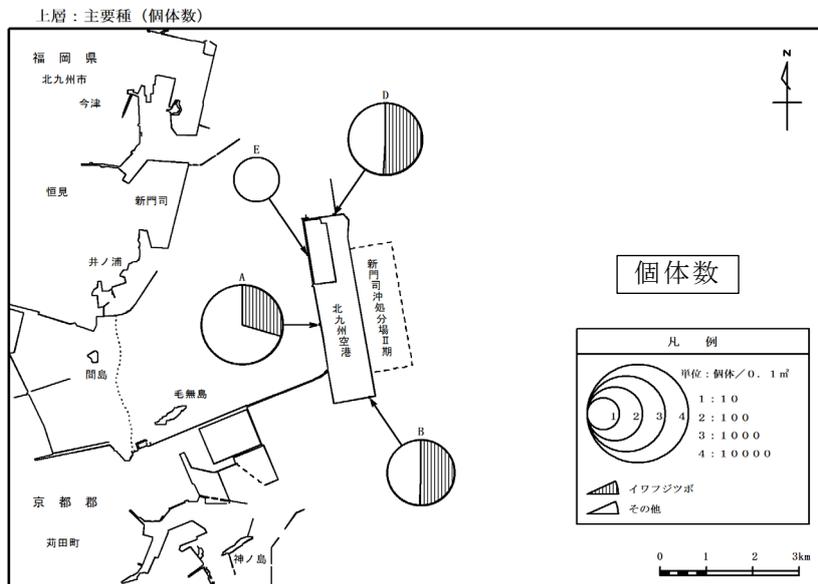
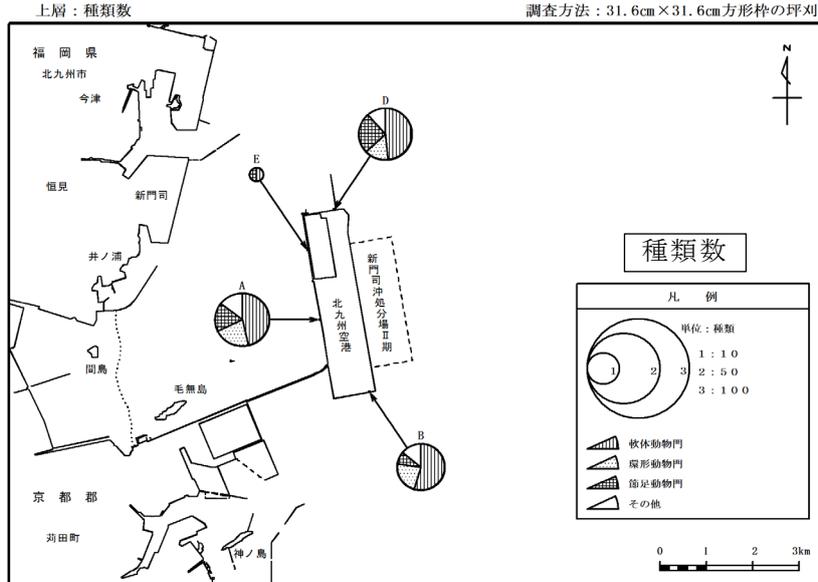


図 2.2.36(7) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度秋季・上層）

調査期日：令和 6年11月19日～20日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

秋季
 中層

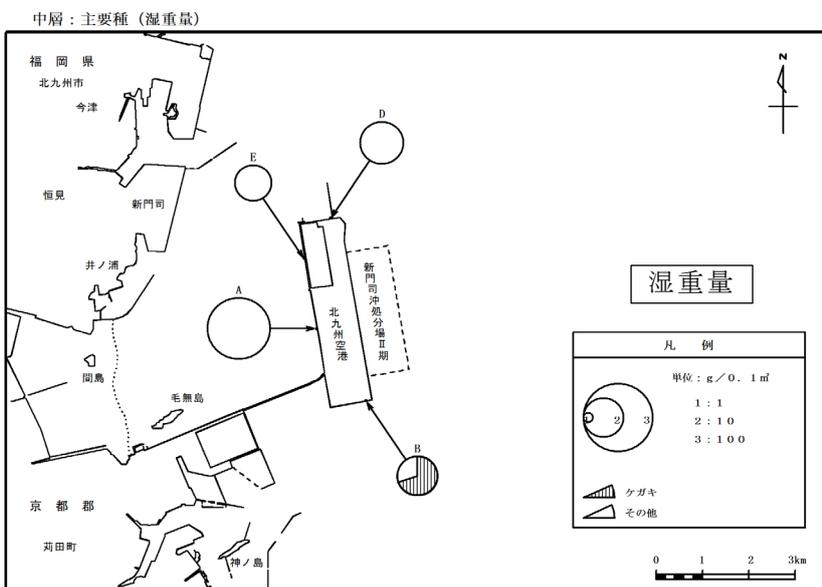
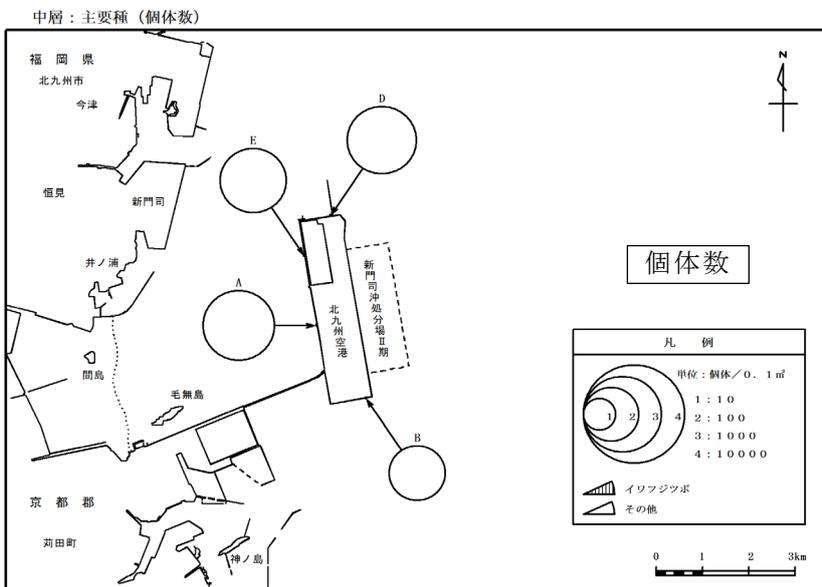
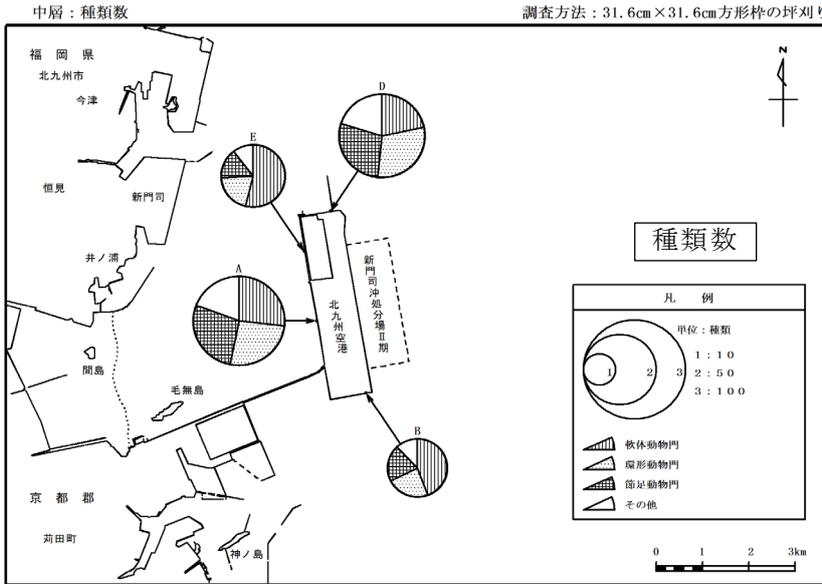


図 2.2.36(8) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度秋季・中層）

調査期日：令和 6年11月19日～20日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

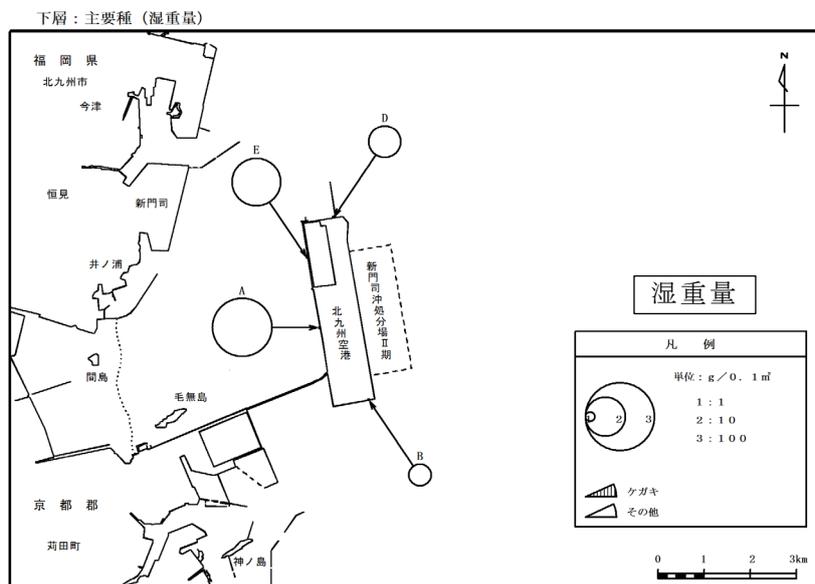
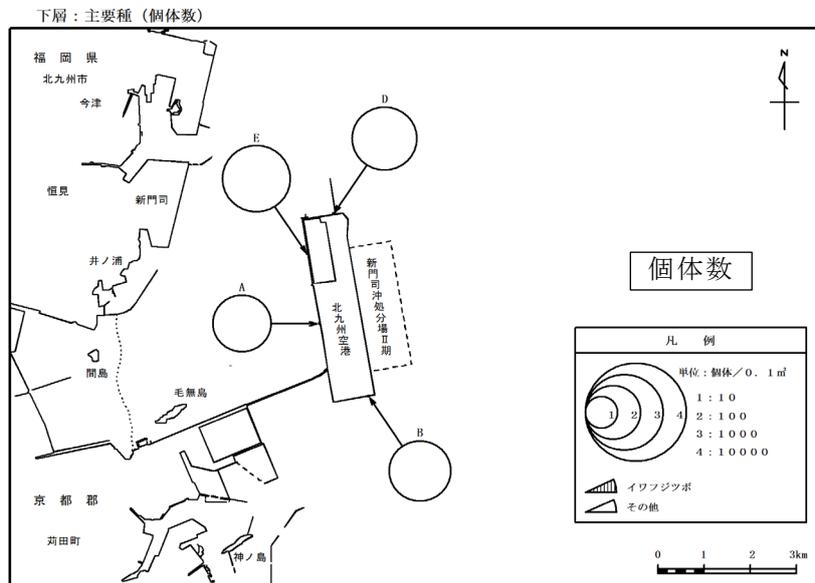
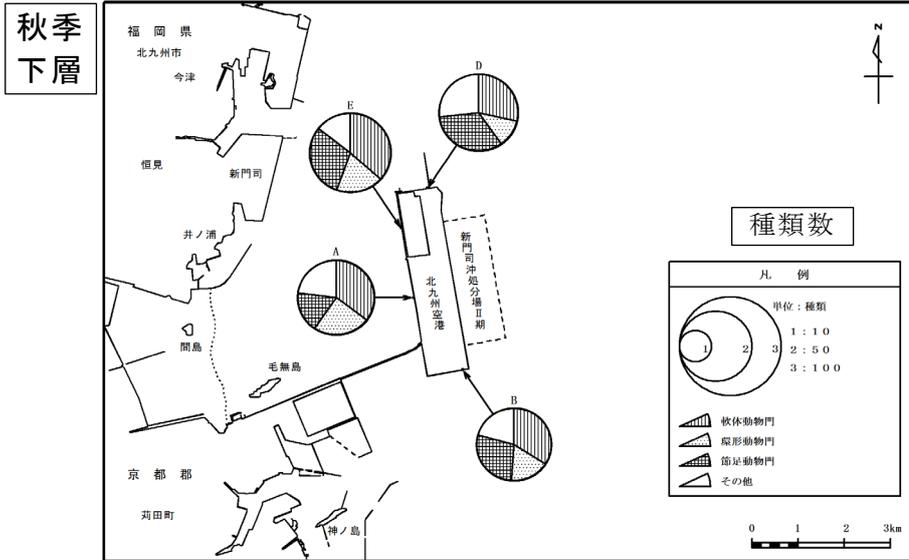


図 2.2.36(9) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度秋季・下層）

調査期日：令和 7年 1月20日～21日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の採集

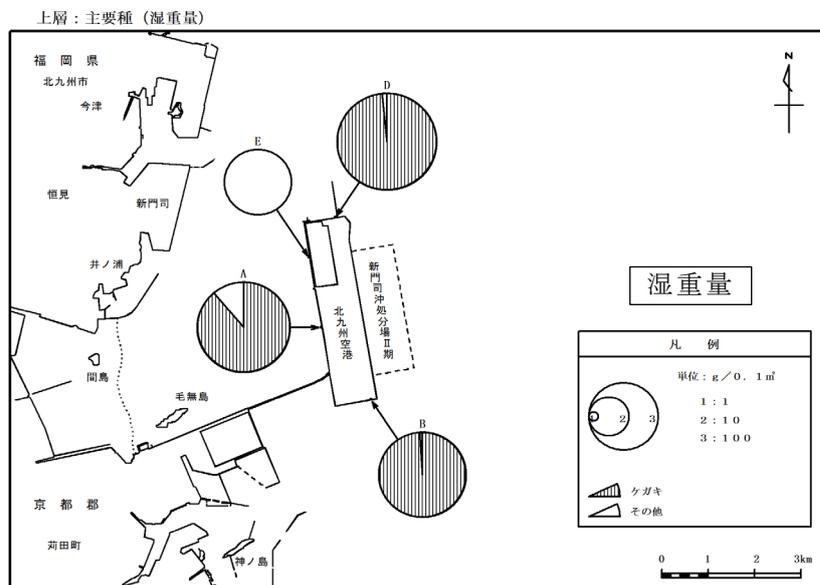
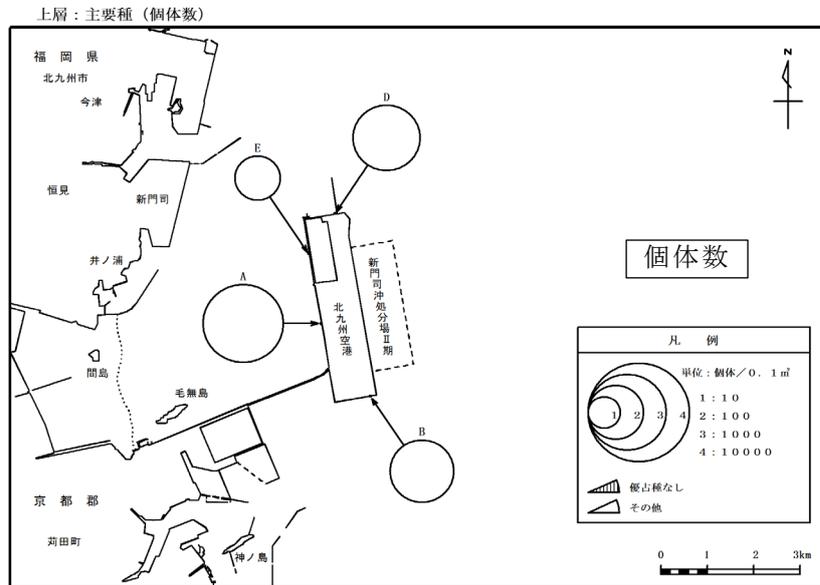
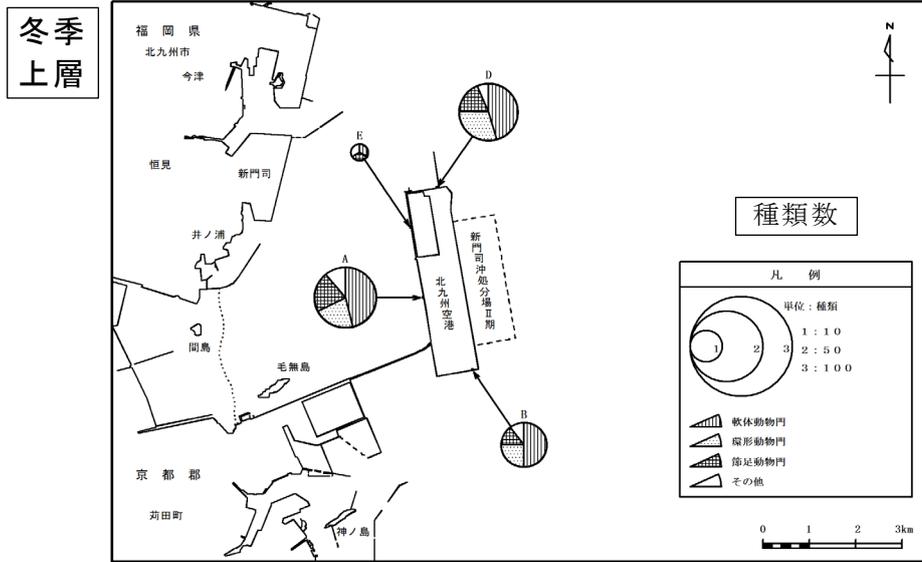


図 2.2.36 (10) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度冬季・上層）

調査期日：令和 7年 1月20日～21日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の坪刈り

冬季
 中層

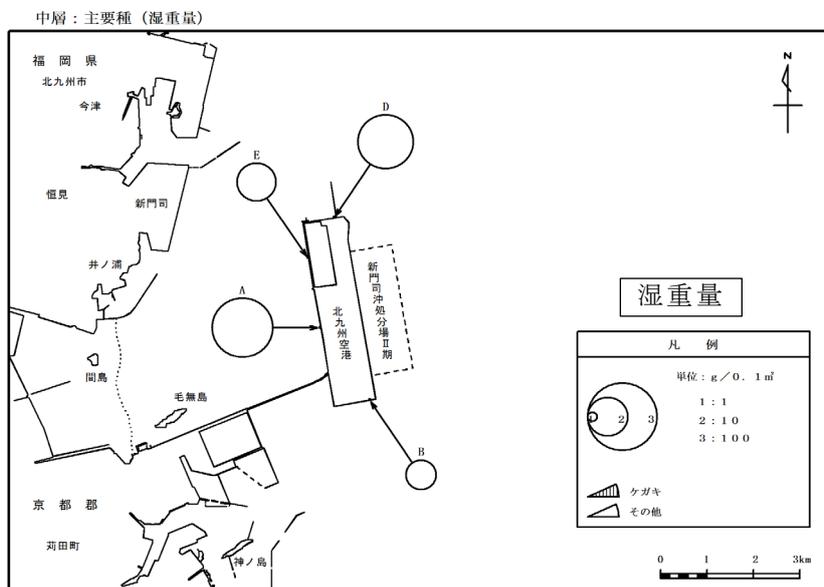
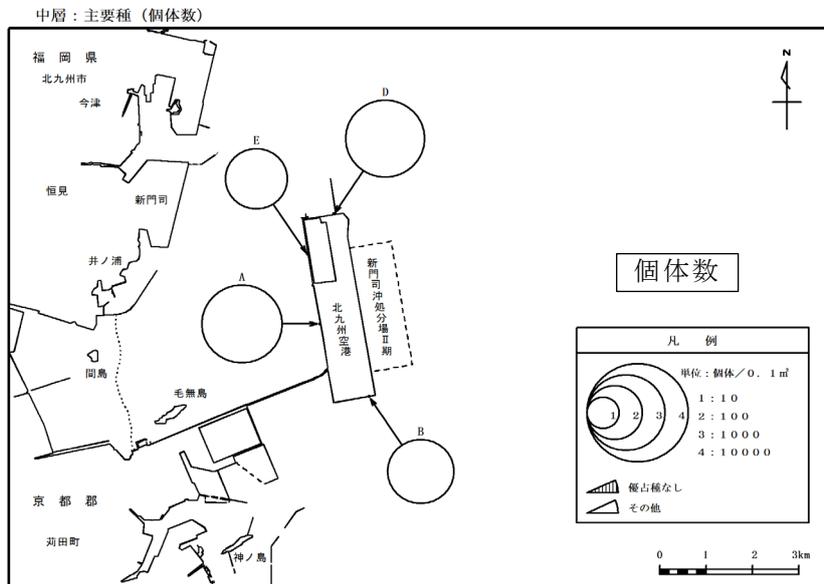
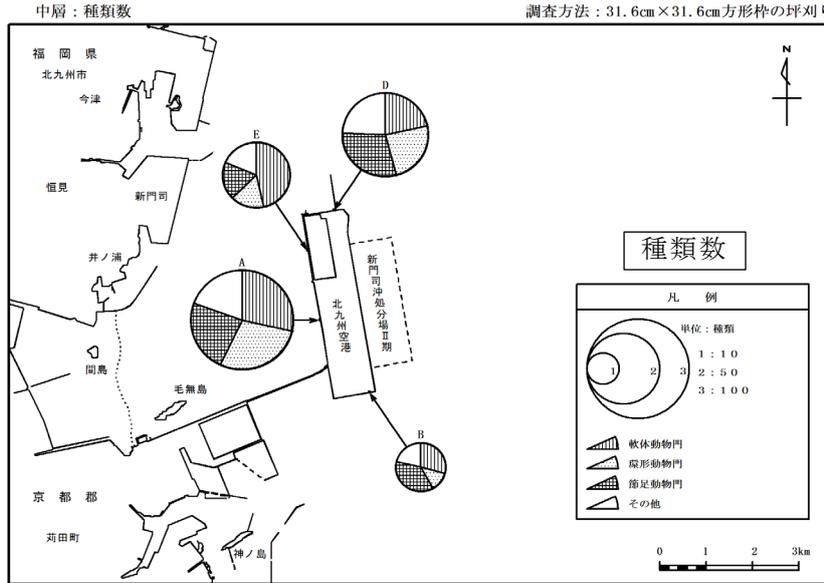


図 2.2.36(11) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度冬季・中層）

調査期日：令和 7年 1月20日～21日
 調査方法：31.6cm×31.6cm方形枠の採り

冬季
 下層

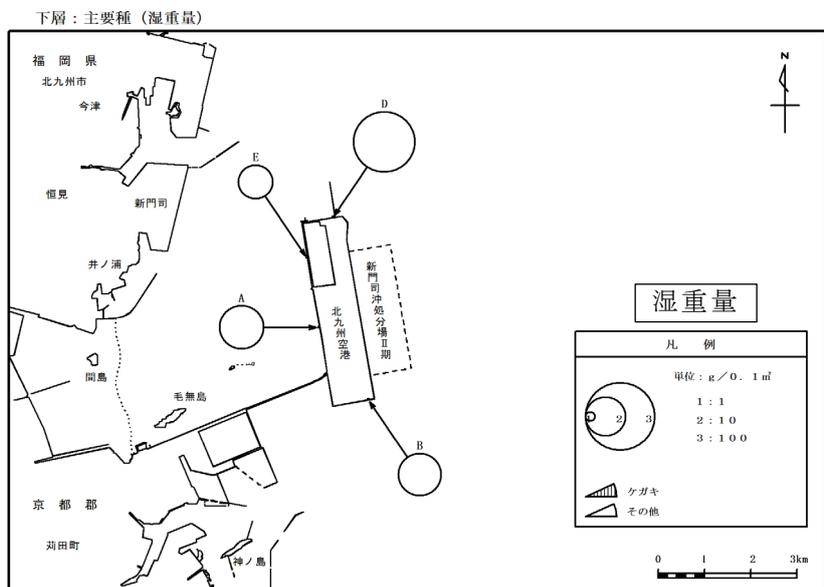
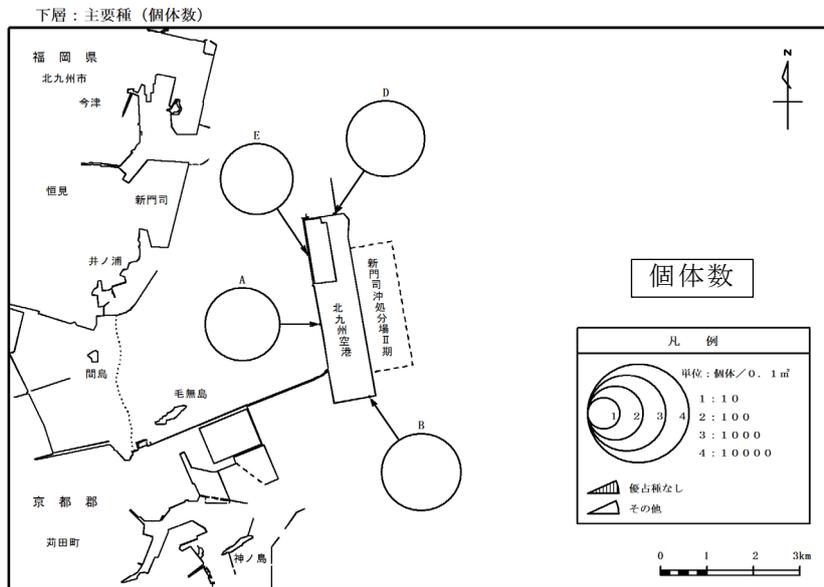
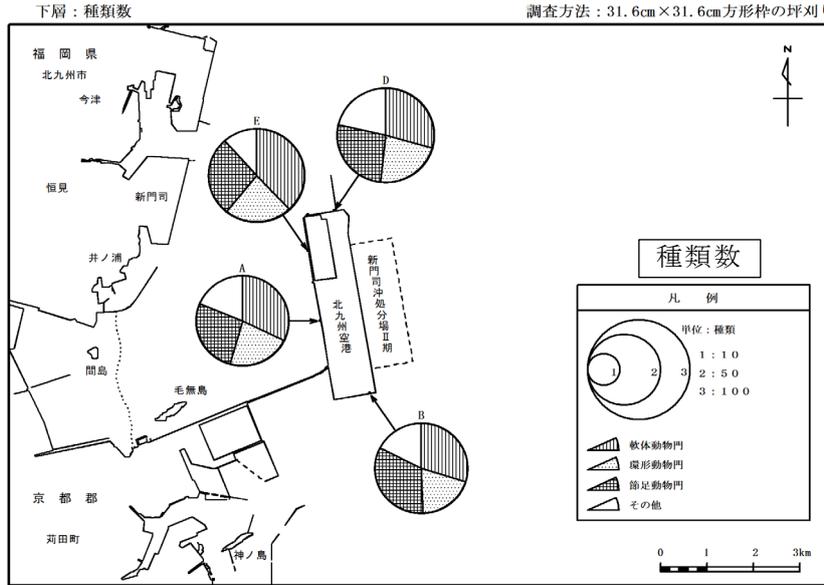


図 2.2.36(12) 付着生物（動物）の水平分布（令和6年度冬季・下層）

(3) 評価

調査地点別の種類数、個体数の経年変化を図2.2.37に示す。以下に調査地点ごとに経年変化の傾向を検討した。

1) 経年変化

● St. A

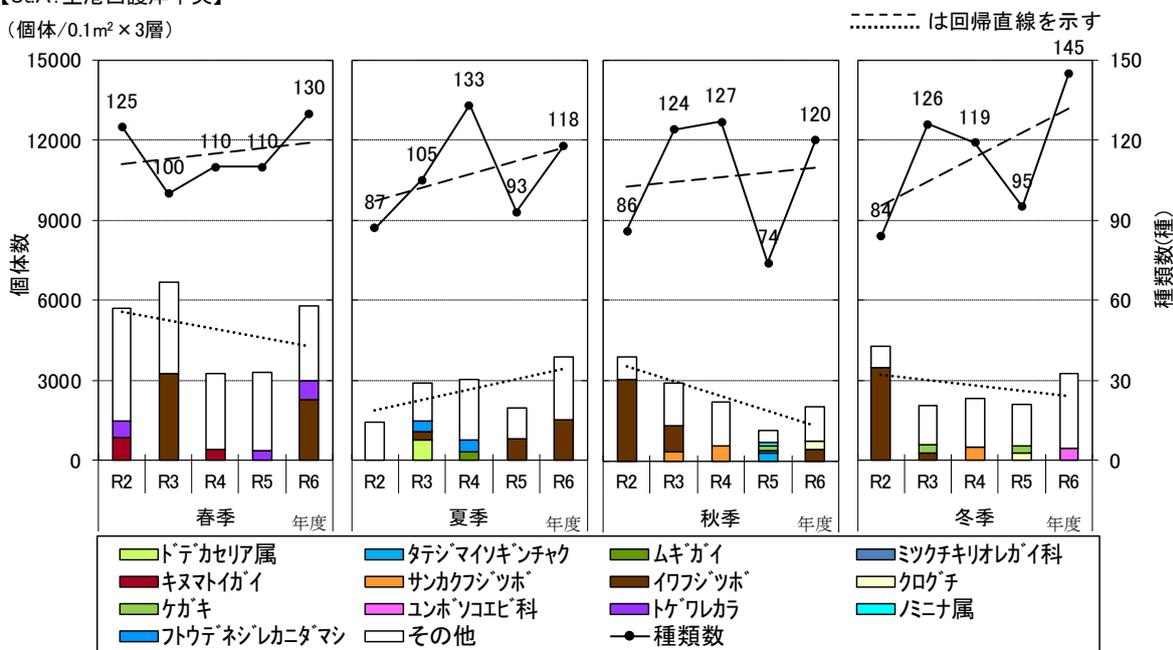
St. A の直近 5 か年間における種類数は、74~145 種類の範囲で推移し、いずれの季節も増加傾向がみられた。

個体数は、春季にやや多く、主な出現種を個体数からみると、春季から冬季にかけて節足動物門のイワフジツボが優占する頻度が高く、そのほかでは節足動物門のトゲワレカラ、サンカクフジツボ、軟体動物門のケガキの出現数が多かった。

湿重量は春季及び冬季にやや多く、主な出現種を湿重量からみると、年間を通して軟体動物門のケガキの割合が高く、春季はマガキやオオヘビガイ等の割合も高かった。

【St.A: 空港西護岸中央】

(個体/0.1m² × 3層)



【St.A: 空港西護岸中央】

(g/0.1m² × 3層)

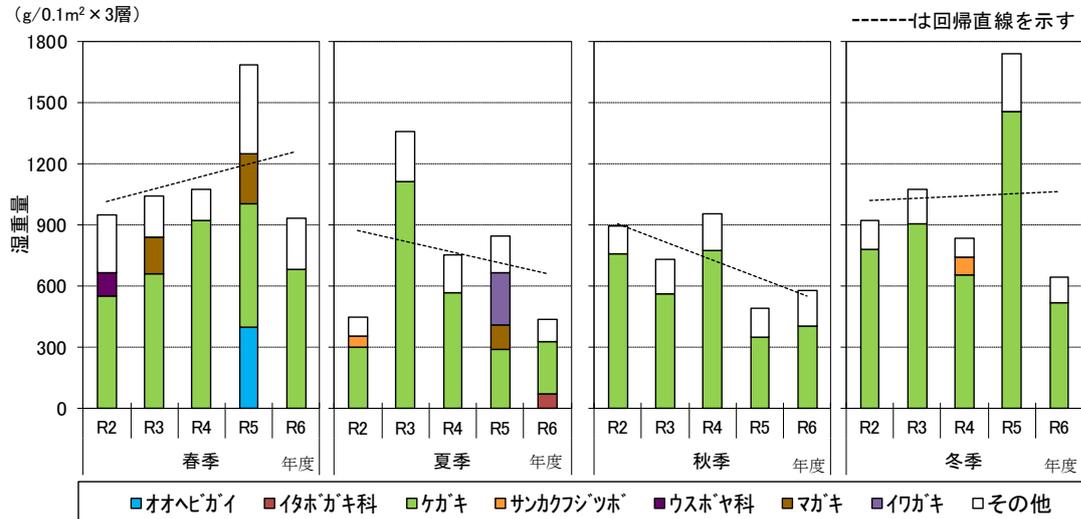


図 2.2.37(1) 付着生物（動物）の経年変化 (St. A)

● St. B

St. Bの直近5か年間における種類数は、73～135種類の範囲で推移し、夏季に増加傾向、春季、秋季及び冬季に減少傾向であった。

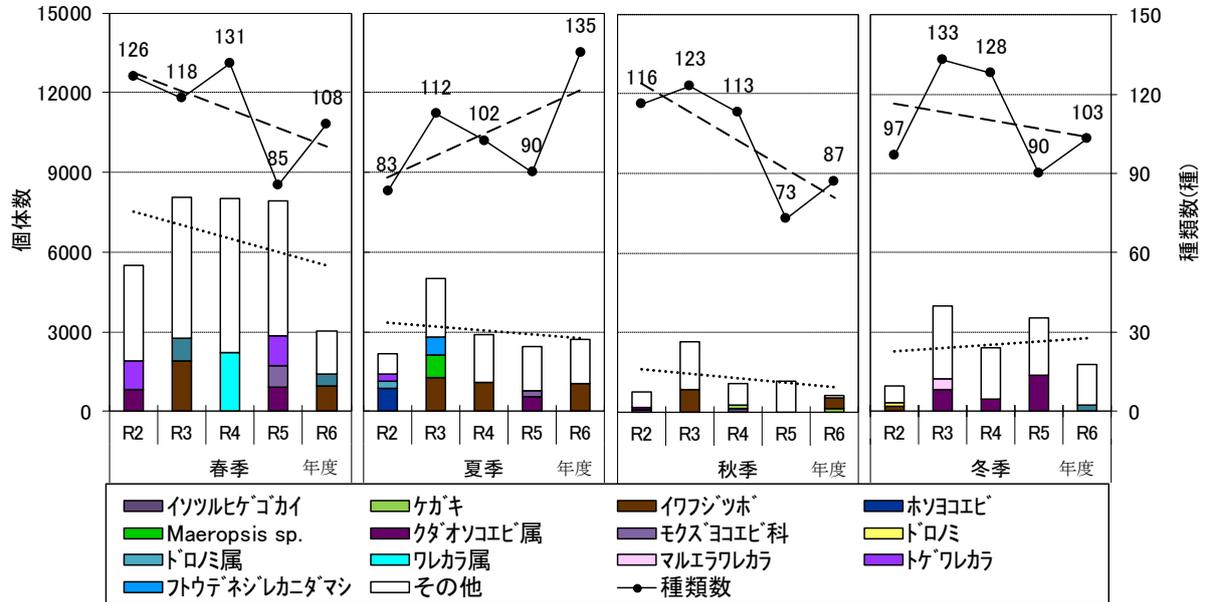
個体数は、春季に多い傾向がみられたが、令和6年度春季は少なかった。主な出現種を個体数からみると、春季では節足動物門のイワフジツボやトゲワレカラを含むワレカラ属、夏季では節足動物門のホソヨコエビやイワフジツボ、秋季では節足動物門のイワフジツボ、冬季では節足動物門のクダオソコエビ属、マルエラワレカラ等であった。

湿重量は、年度により増減はあるが、季節的な傾向はみられなかった。主な出現種を湿重量からみると年間を通して軟体動物門のケガキの割合が高かった。

【St.B:空港南護岸東】

(個体/0.1m²×3層)

..... は回帰直線を示す



【St.B:空港南護岸東】

(g/0.1m²×3層)

----- は回帰直線を示す

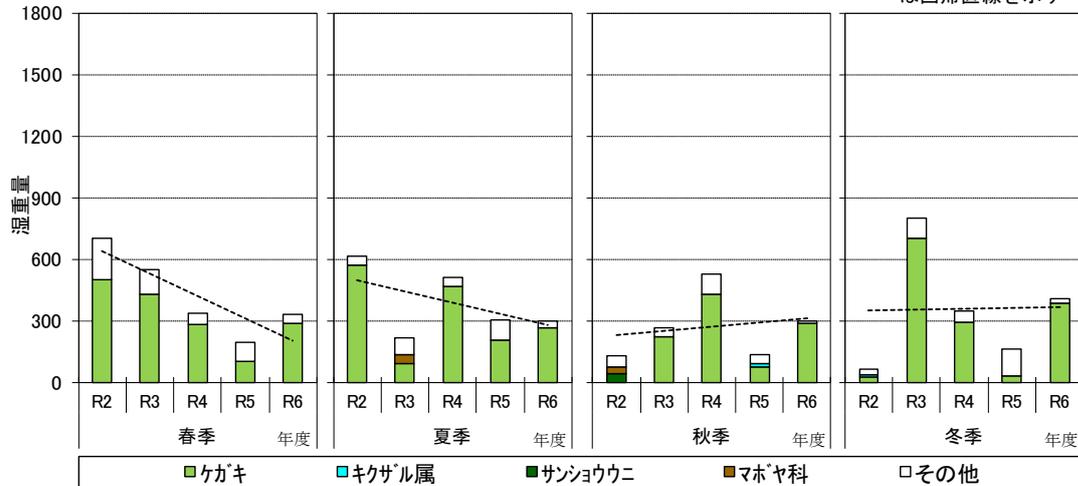


図 2. 2. 37(2) 付着生物（動物）の経年変化 (St. B)

● St. D

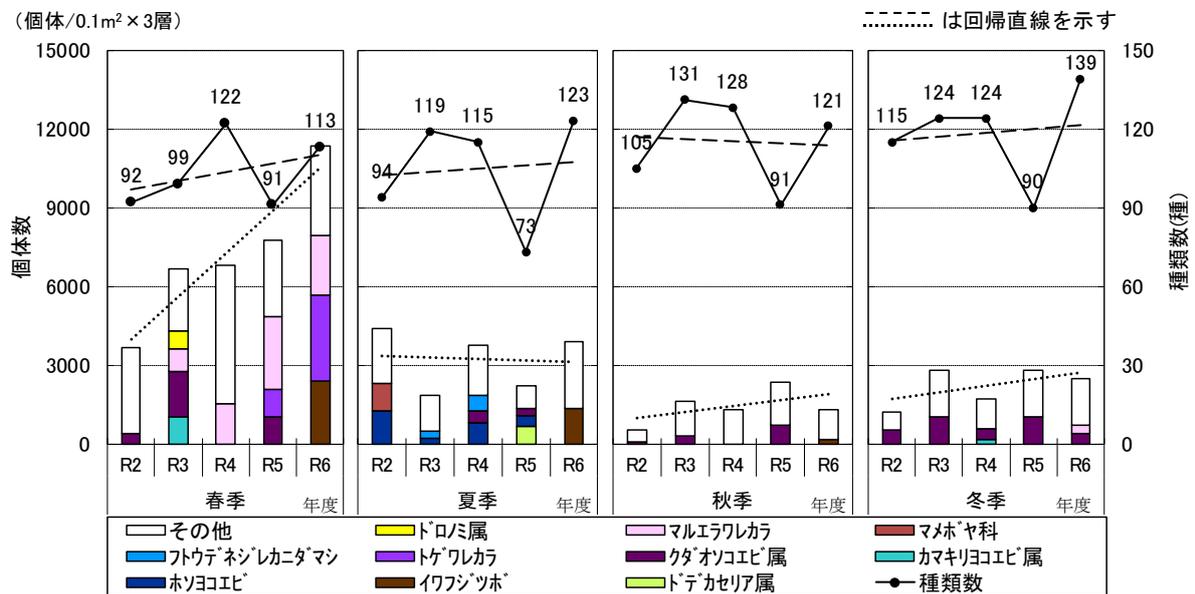
St. Dの直近5か年間における種類数は、73～139種類の範囲で推移しており、春季は増加傾向、夏季～冬季で横ばい傾向であった。

個体数は、春季に多い傾向がみられ、主な出現種を個体数からみると春季は節足動物門のワレカラ属のトゲワレカラとマルエラワレカラ、イワフジツボ、夏季は節足動物門のホソヨコエビ、イワフジツボ、秋季及び冬季は節足動物門のクダオソコエビ属であった。

湿重量は、年度により増減はあるが、季節的な傾向はみられなかった。主な出現種を湿重量からみると年間を通して軟体動物門のケガキの割合が高く、調査年度によりオオヘビガイの割合も高かった。

【St.D:空港北護岸】

(個体/0.1m²×3層)



【St.D:空港北護岸】

(g/0.1m²×3層)

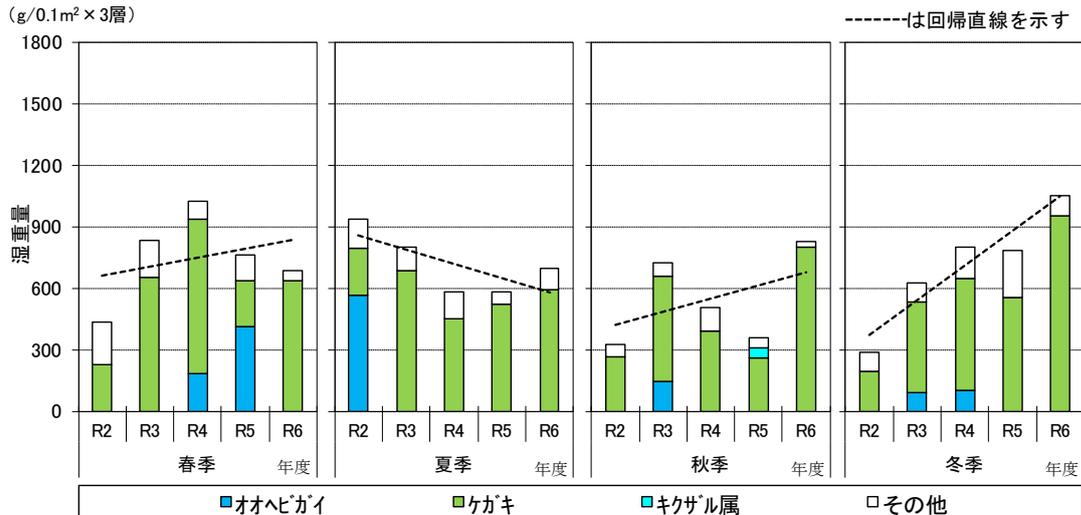


図 2.2.37(3) 付着生物（動物）の経年変化(St. D)

● St. E

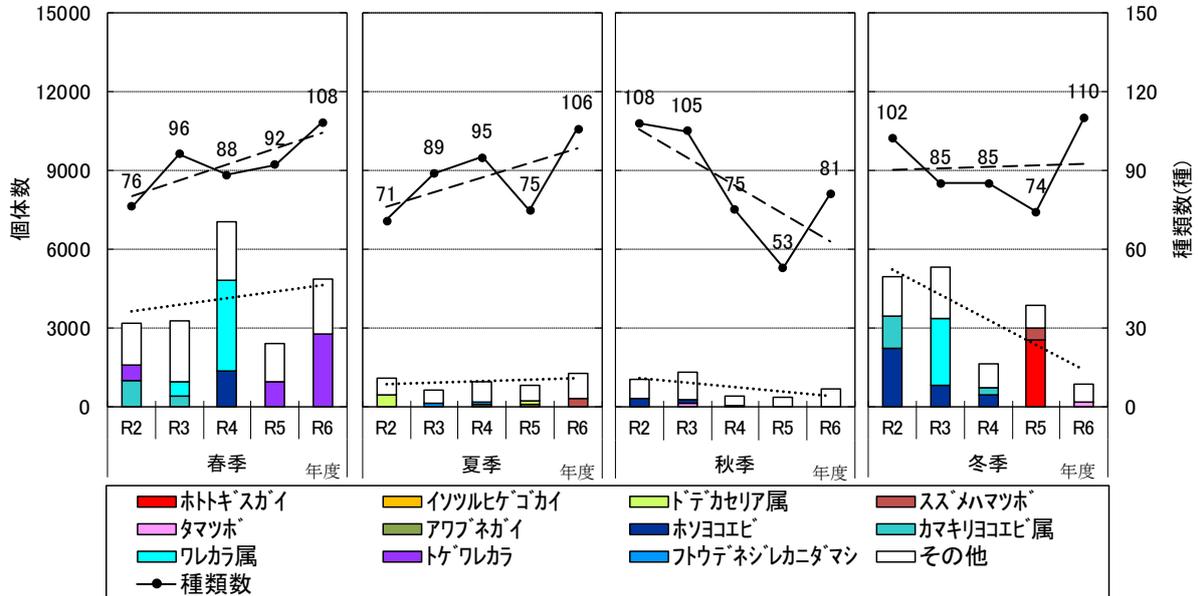
St. Eの直近5か年間における種類数は、53～110種類の範囲で推移しており、春季及び夏季は増加傾向、秋季は減少傾向、冬季は概ね横ばいであった。

個体数は、春季及び冬季で多い傾向がみられた。個体数からみた主な出現種は、春季では節足動物門のトゲワレカラを含むワレカラ属、夏季は環形動物門のドデカセリア属等、秋季は節足動物門のホソヨコエビ等、冬季は節足動物門のホソヨコエビ、カマキリヨコエビ属、ワレカラ属、軟体動物門のホトトギスガイであった。

湿重量は、年度により増減はあるが、春季がやや多い傾向であった。主な出現種を湿重量からみると、年間を通して節足動物門のカメノテの割合が高く、年度によっては軟体動物門のキクザル属及び同属のサルノカシラガイ、棘皮動物門のムラサキウニ、アカウニ、パフンウニ等も割合が高かった。

【St.E:空港西護岸北】

(個体/0.1m²×3層)



【St.E:空港西護岸北】

(g/0.1m²×3層)

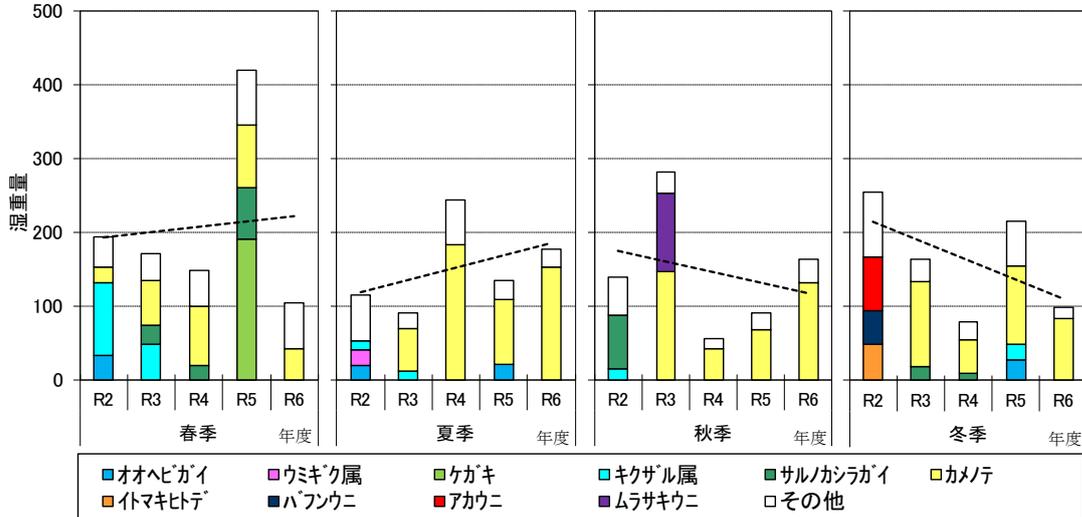


図 2.2.37(4) 付着生物（動物）の経年変化 (St. E)

2) 付着生物（動物）調査結果のまとめ

令和6年度の総出現種類数は、年間を通して200種前後であり、冬季が最も多く、秋季が最も少なかったが、季節間に大きな差はなかった。個体数は春季に多く、秋季に少ない傾向にあった。個体数からみた主な出現種は、節足動物門のイワフジツボ、トゲワレカラであった。

令和2年度から令和6年度までの直近5か年間の傾向をみると、出現種数は調査地点や調査年度により増減がみられるものの、概ね維持されていた。個体数は春季に多い傾向がみられ、主な出現種は、節足動物門のイワフジツボやトゲワレカラ等であった。湿重量は、春季にやや多い傾向であるが、季節間に大きな差はみられなかった。湿重量からみた主な出現種は、季節にかかわらずケガキであった。季節ごとの出現個体数や湿重量には、経年的な一定の増減の傾向はみられず、大きな変化はみられなかった。

埋立地周辺の付着生物（動物）の種類数、個体数、主な出現種については、環境の悪化を示す著しい変化（種類数、個体数の減少傾向の継続等）はみられず、事業による付着生物（動物）への影響は確認されなかった。

2.2.10 魚介類

魚介類調査については、令和6年5月29日（春季調査）、令和6年8月1日（夏季調査）、令和6年11月5日（秋季調査）、令和7年1月27日（冬季調査）に実施した。調査地点は、図2.1.1(1)に示したとおりである。

(1) 調査結果

魚介類の季節別出現状況を表2.2.12、季節変化を図2.2.38、水平分布を図2.2.39に示す。

魚介類の各季の総出現種類数は、38～56種類の範囲にあり、冬季に少なかった。

地点別平均個体数は、320～1,045個体/曳網の範囲にあり、春季及び秋季に多く、冬季に少なかった。個体数からみた主な出現種は、春季は魚類のヒイラギ、夏季は節足動物のヘリトリコブシやヒイラギ、秋季は軟体動物門のジンドウイカ属や節足動物門のヘリトリコブシとシバエビ、冬季は節足動物門のヘリトリコブシや棘皮動物門のスナヒトデであった。

地点別平均湿重量は、1,863.3～20,540.2g/曳網の範囲にあり、春季に多かった。湿重量からみた主な出現種は、春季は魚類のコショウダイ、ヒイラギ、ツバクロエイ、ハモ、夏季は魚類のヒイラギとスズキや棘皮動物門のスナヒトデ、秋季は軟体動物門のジンドウイカ属や節足動物門のシバエビ、冬季は棘皮動物門のマナマコとスナヒトデやシバエビであった。

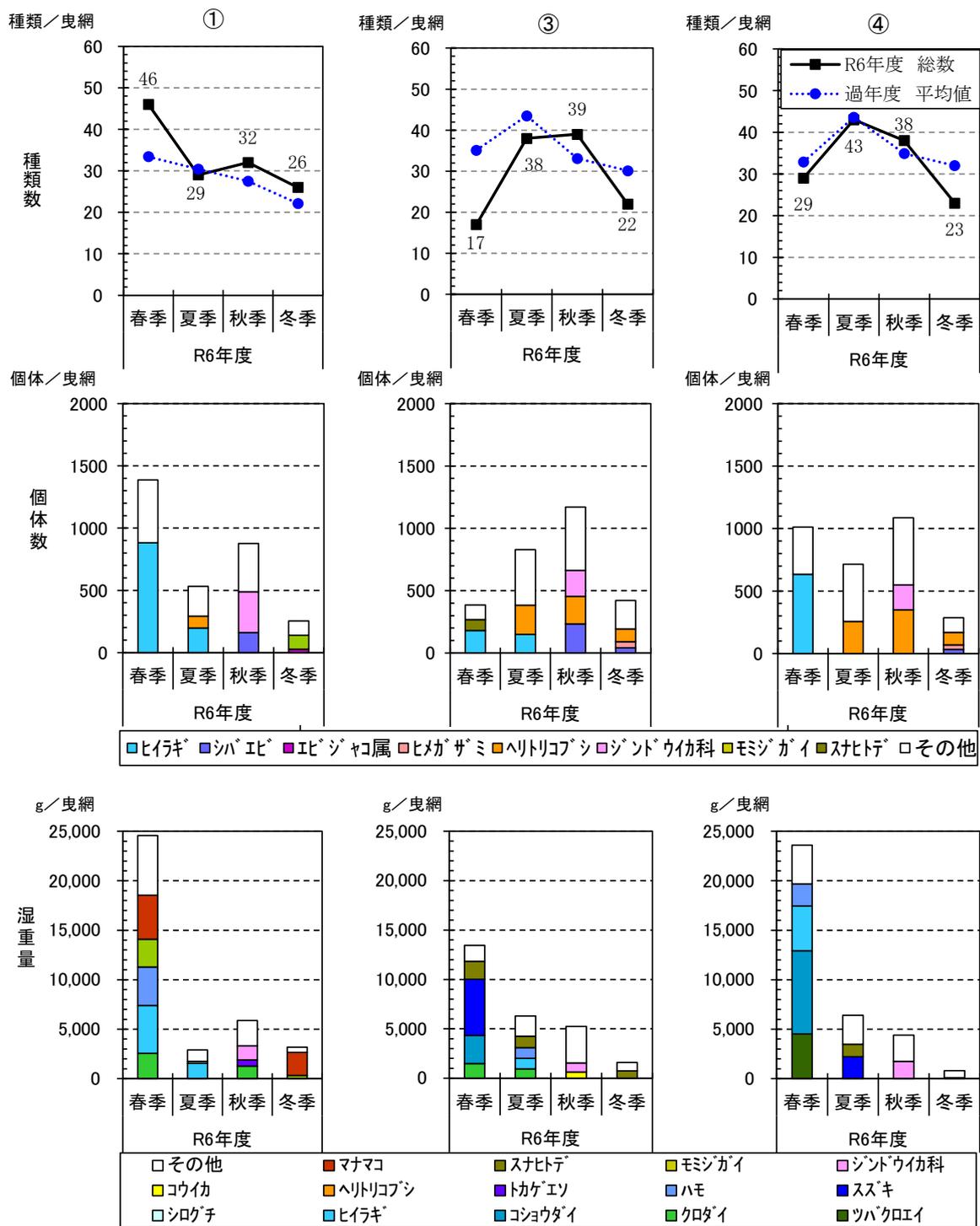
令和6年度に出現した主な魚介類は、過年度と同様な種類が出現し、内湾域で普通に出現する種類であった。

水平分布をみると、個体数では春季の空港島西側の①で最も多いが、他の季節では最も少なく、明瞭な傾向はみられなかった。湿重量は春季の空港島西側の①と東側の④で多く、その大部分は魚類が占めた。

表 2.2.12 魚介類の季節別出現状況

項目/調査時期	令和6年5月29日 (春季:3点)	令和5年8月22日 (夏季:3点)	令和5年11月20日 (秋季:3点)	令和6年1月17日 (冬季:3点)
総出現種類数	52	56	54	38
平均出現種類数 (範囲)	30 (17 ~ 44)	37 (29 ~ 43)	36 (32 ~ 39)	24 (22 ~ 26)
平均出現個体数 (個体/曳網) (範囲)	927 (385 ~ 1,386)	691 (532 ~ 828)	1,045 (876 ~ 1,171)	320 (254 ~ 421)
平均出現湿重量 (g/曳網) (範囲)	20,540.2 13,447.6 ~ 24,561.9	5,204.7 2,902.7 ~ 6,412.9	5,175.8 4,401.2 ~ 5,885.3	1,863.3 814.7 ~ 3,186.2
主な出現種と その平均個体数 (個体/曳網) ()内は組成比率(%)	ヒイラギ 565(60.9)	ヘリトリコブシ 195(28.2) ヒイラギ 134(19.4)	ジンドウイカ属 245(23.4) ヘリトリコブシ 204(19.5) シバエビ 147(14.0)	ヘリトリコブシ 77(24.0) モミジガイ 37(11.6) ヒメガザミ 34(10.6)
主な出現種と その平均湿重量 (g/曳網) ()内は組成比率(%)	コショウダイ 3,750.5(18.3) ヒイラギ 3,525.9(17.2) ツバクロエイ 2,181.8(10.6) ハモ 2,051.2(10.0)	ヒイラギ 1,014.5(19.5) スナヒトデ 859.4(16.5) スズキ 741.2(14.2)	ジンドウイカ属 1,366.6(26.4) シバエビ 922.5(17.8)	マナマコ 776.4(41.7) スナヒトデ 327.2(17.6) シバエビ 190.9(10.2)

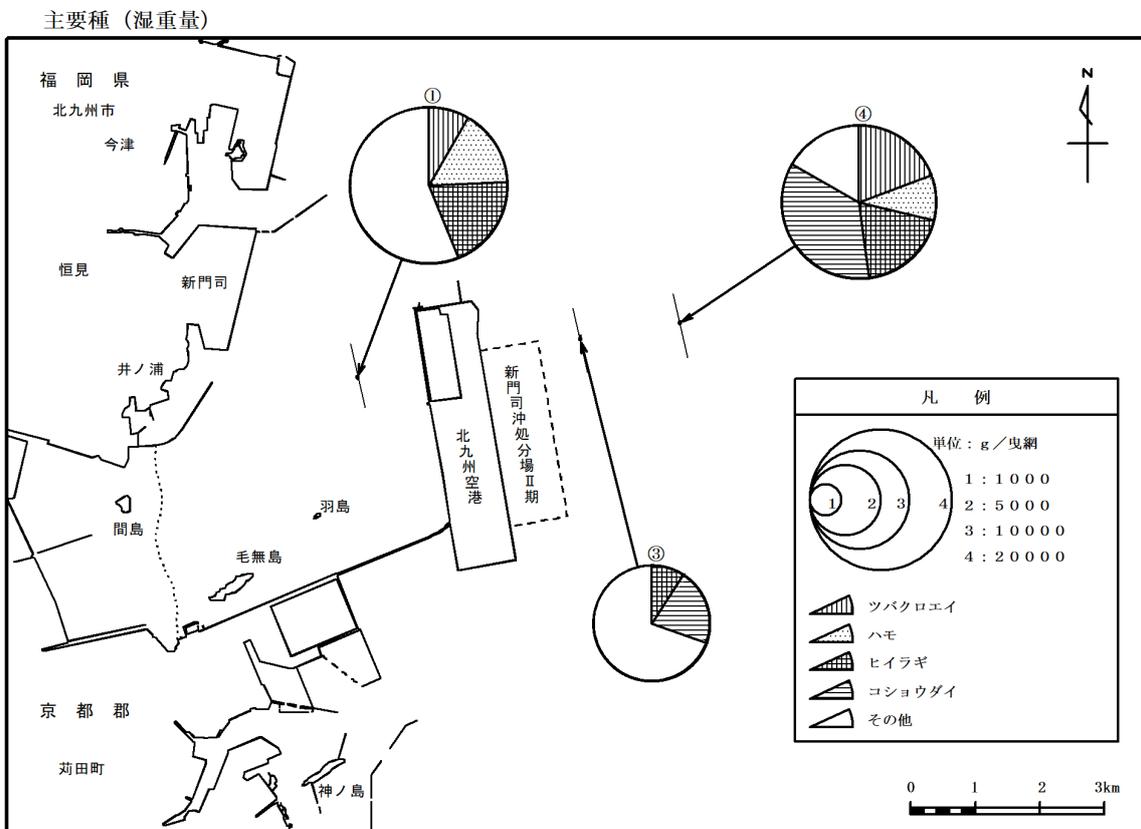
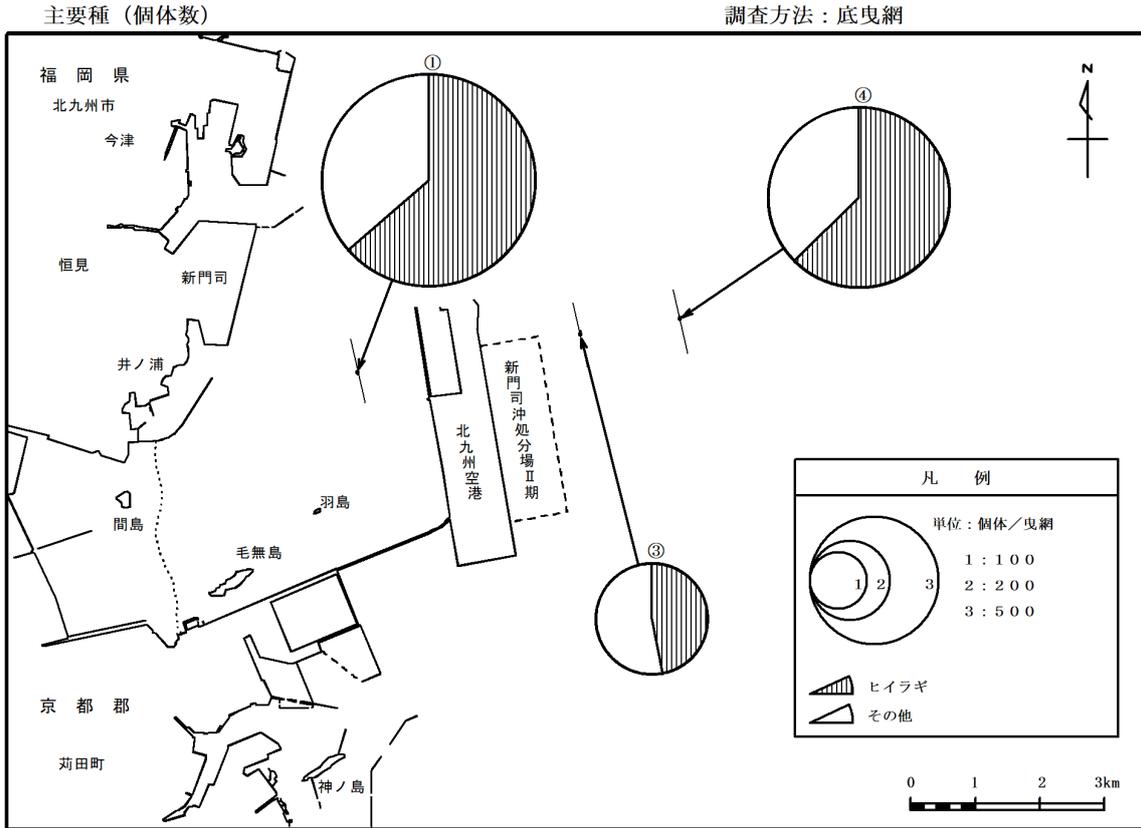
注) 主な出現種には、平均出現個体数、平均出現湿重量の上位5種（但し、組成比率が10%以上）を示す。



注) グラフ中の主な出現種には、出現個体数、出現湿重量の上位 5 種 (但し、組成比率が 10%以上) を示す。

図 2.2.38 魚介類の季節変化 (令和 6 年度 : 調査地点別)

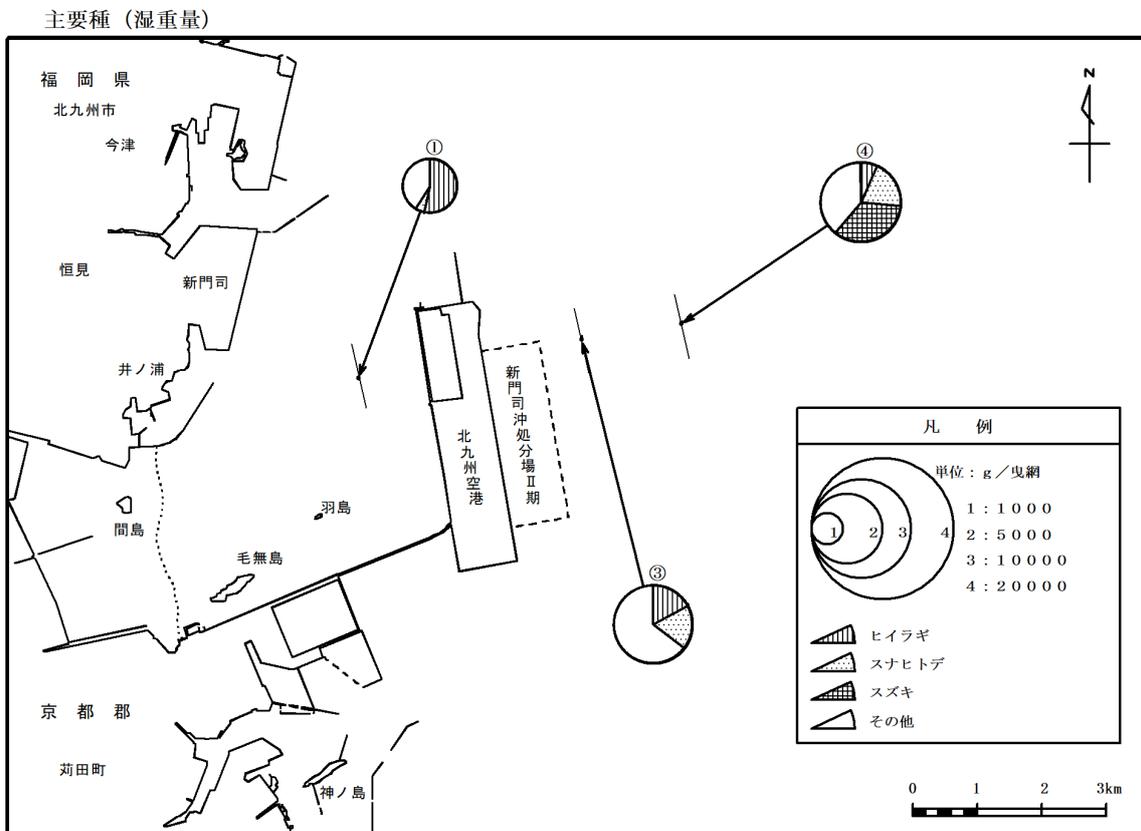
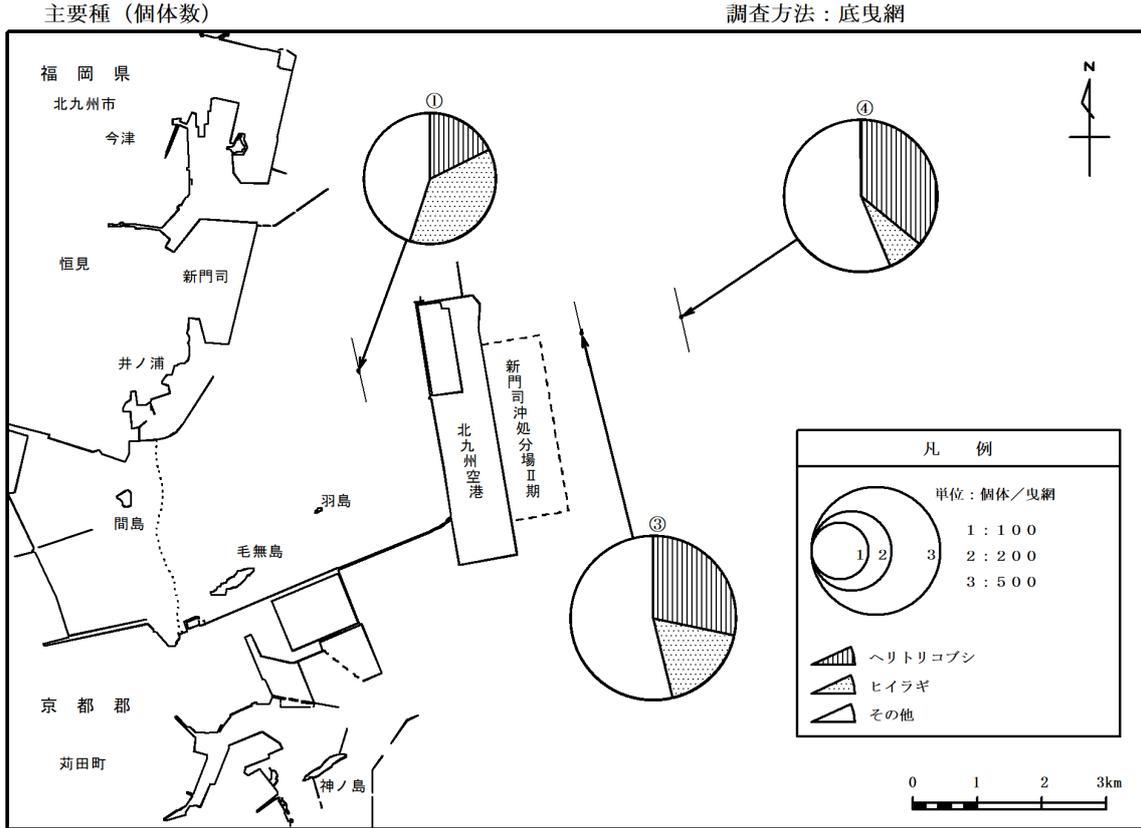
調査期日：令和 6年 5月29日
 調査方法：底曳網



上段：個体数／下段：湿重量

図 2.2.39(1) 魚介類の水平分布（令和6年度春季）

調査期日：令和 6年 8月 1日
 調査方法：底曳網

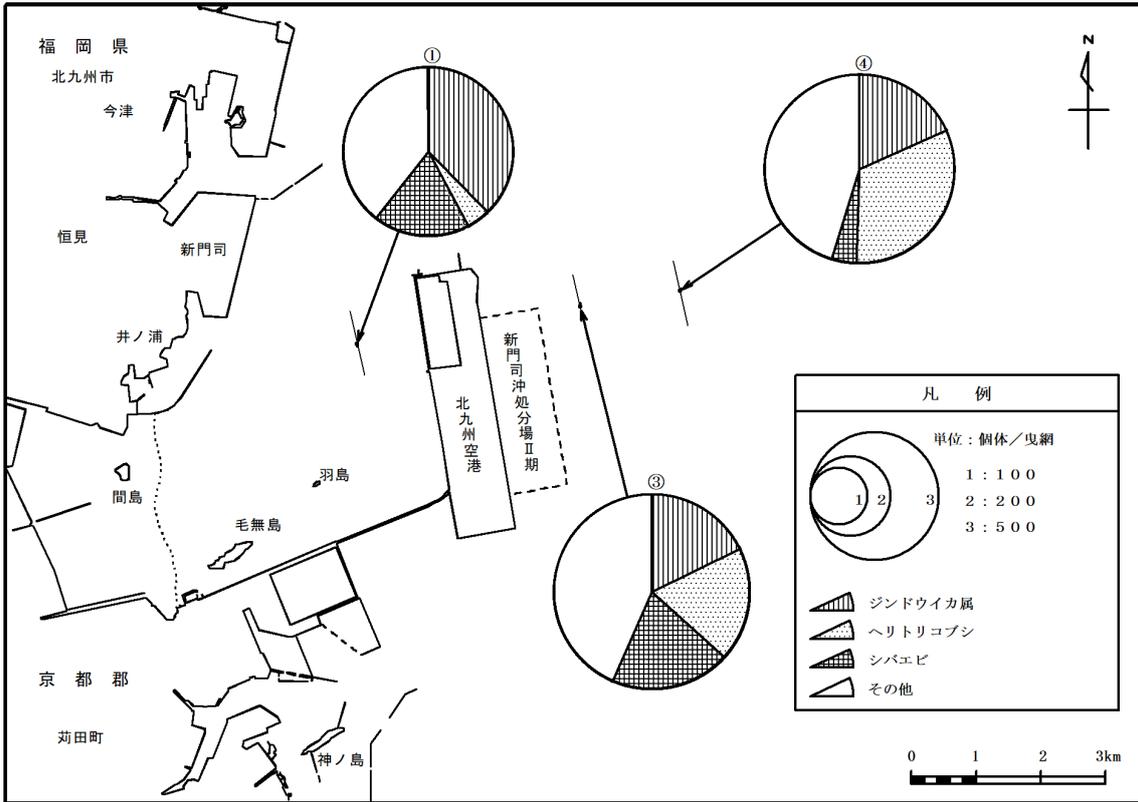


上段：個体数／下段：湿重量

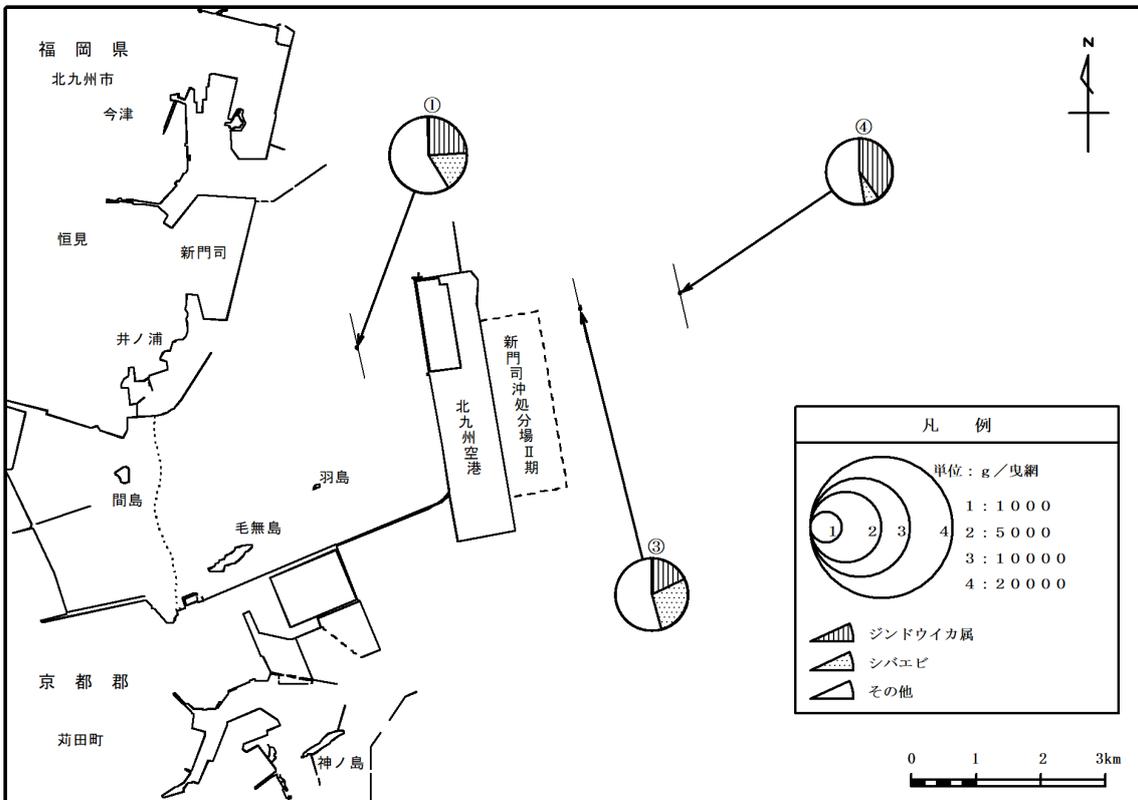
図 2.2.39(2) 魚介類の水平分布（令和6年度夏季）

調査期日：令和 6年11月 5日
 調査方法：底曳網

主要種（個体数）



主要種（湿重量）

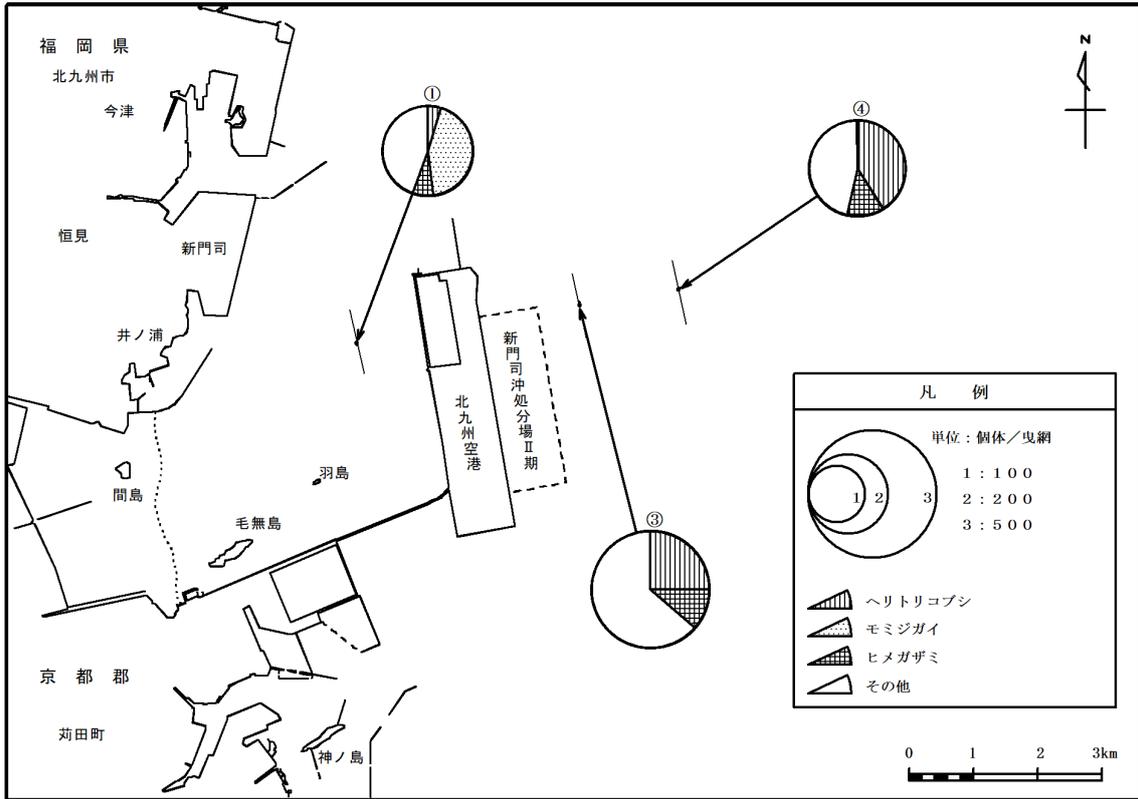


上段：個体数／下段：湿重量

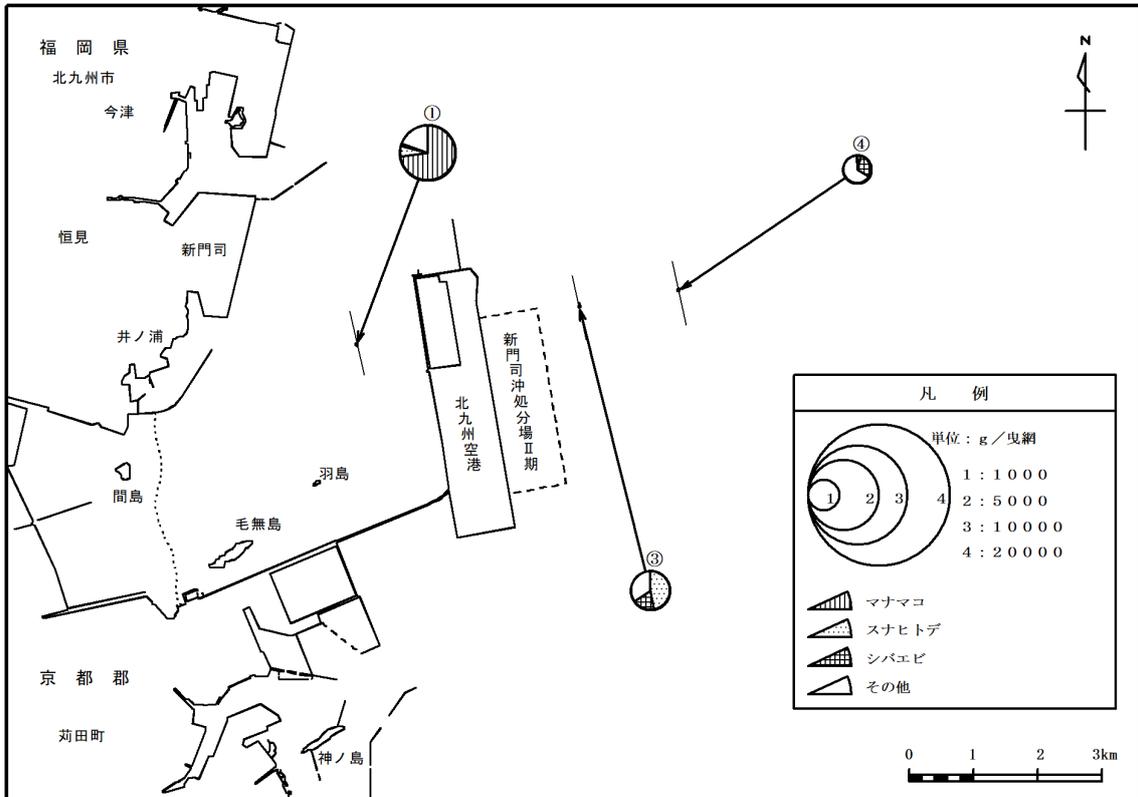
図 2.2.39(3) 魚介類の水平分布（令和6年度秋季）

調査期日：令和 7年 1月27日
 調査方法：底曳網

主要種（個体数）



主要種（湿重量）



上段：個体数／下段：湿重量

図 2.2.39(4) 魚介類の水平分布（令和6年度冬季）

(2) 評価

1) 経年変化

調査地点別の種類数、個体数の経年変化を図2.2.40に示す。以下に調査地点ごとに経年変化の傾向を検討した。

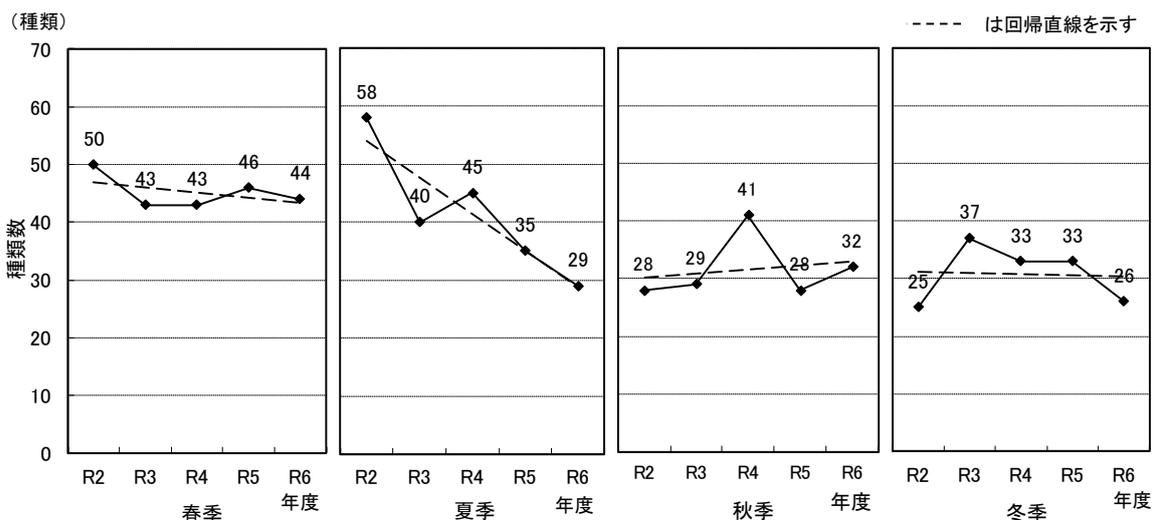
●地点①

地点①の直近5か年間における総出現種類数は、25～58種類の範囲であり、春季に多かった。直近5か年間では、夏季は減少傾向、その他の季節は概ね横ばいであった。

個体数は、春季で最も多く、次いで夏季で多かった。経年変化は、調査年度によりばらつきはあるが春季と秋季でやや漸増傾向、夏季でやや漸減傾向、冬季で概ね横ばいであった。

個体数からみた主な出現種には、大きな変化はみられず、春季は魚類のヒイラギ、夏季は魚類のヒイラギや棘皮動物門のスナヒトデ等、秋季は軟体動物門のジンドウイカ属や節足動物門のトラエビ、冬季は棘皮動物門のスナヒトデが多く出現する季節的な出現傾向がみられた。

【地点①】



【地点①】

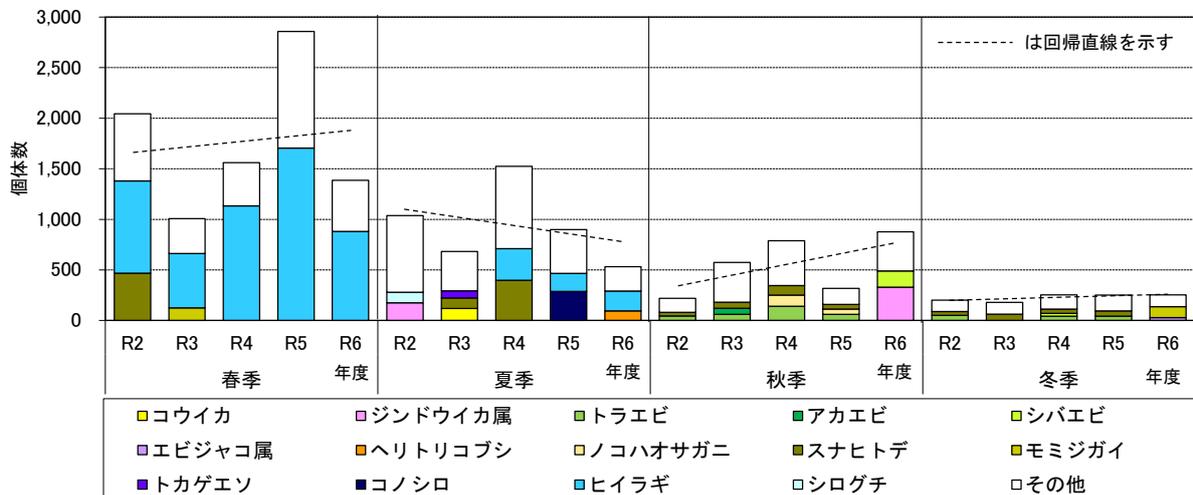


図 2.2.40(1) 魚介類の経年変化 (地点①)

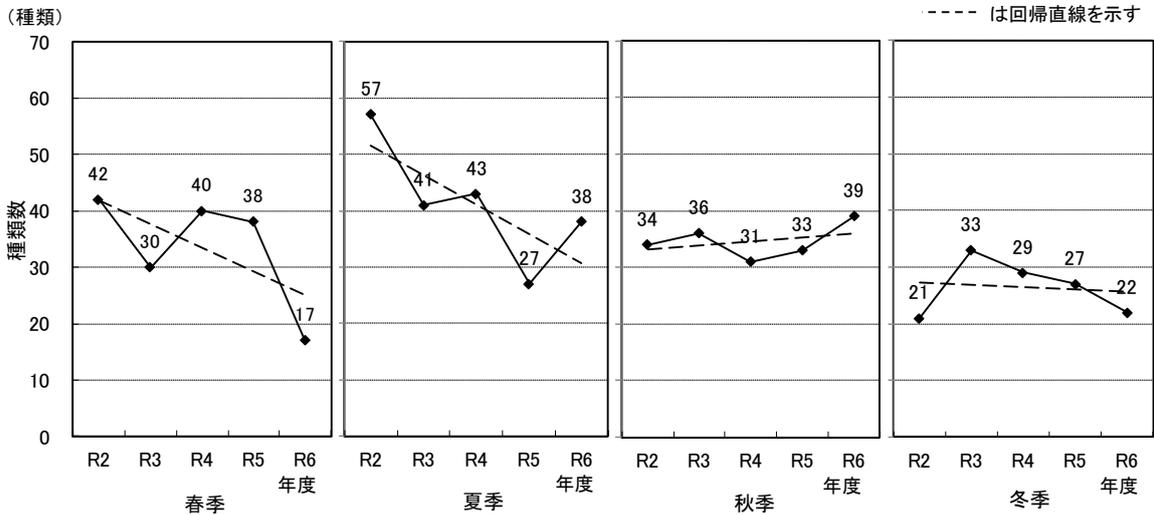
●地点③

地点③の直近5か年間における総出現種類数は、17～57種類の範囲であり、調査年度によりばらつきはあるが夏季に多く、冬季に少なかった。直近5か年間の傾向をみると、春季及び夏季は減少傾向、秋季及び冬季は概ね横ばいであった。

個体数は、調査年度によりばらつきはあるが、春季や夏季に多く、冬季に少なかった。経年変化は、調査年度により増減はあるが秋季にやや増加傾向、春季と夏季にやや減少傾向、冬季は概ね横ばいであった。

個体数からみた主な出現種は、春季は魚類のヒイラギや棘皮動物門のスナヒトデ、夏季は節足動物門のヘリトリコブシとヒメガザミや棘皮動物門のスナヒトデ、秋季は節足動物門のアカエビ、トラエビとシバエビ、冬季は棘皮動物門のスナヒトデや節足動物門のヘリトリコブシの出現が多かった。

【地点③】



【地点③】

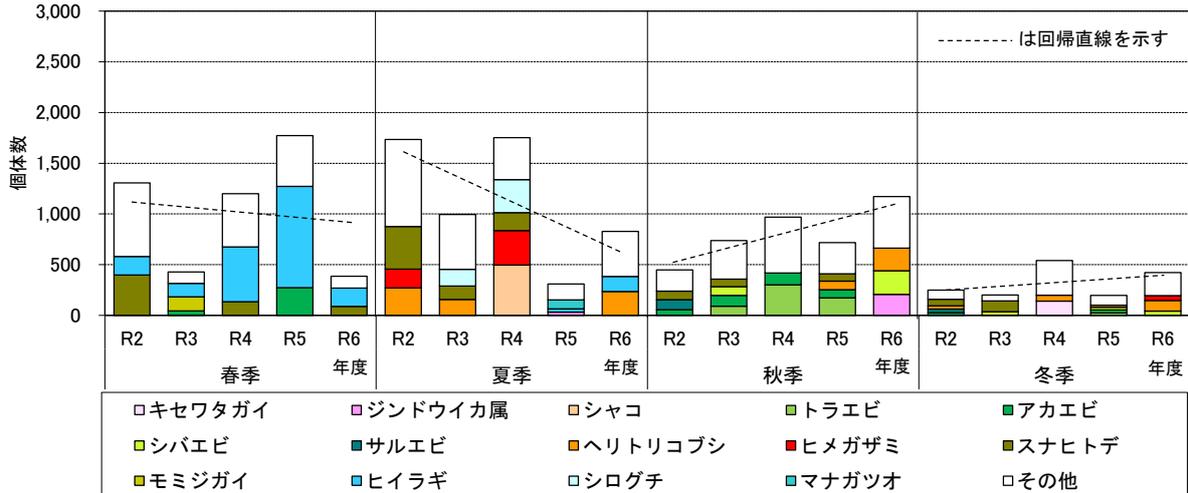


図 2.2.40(2) 魚介類の経年変化 (地点③)

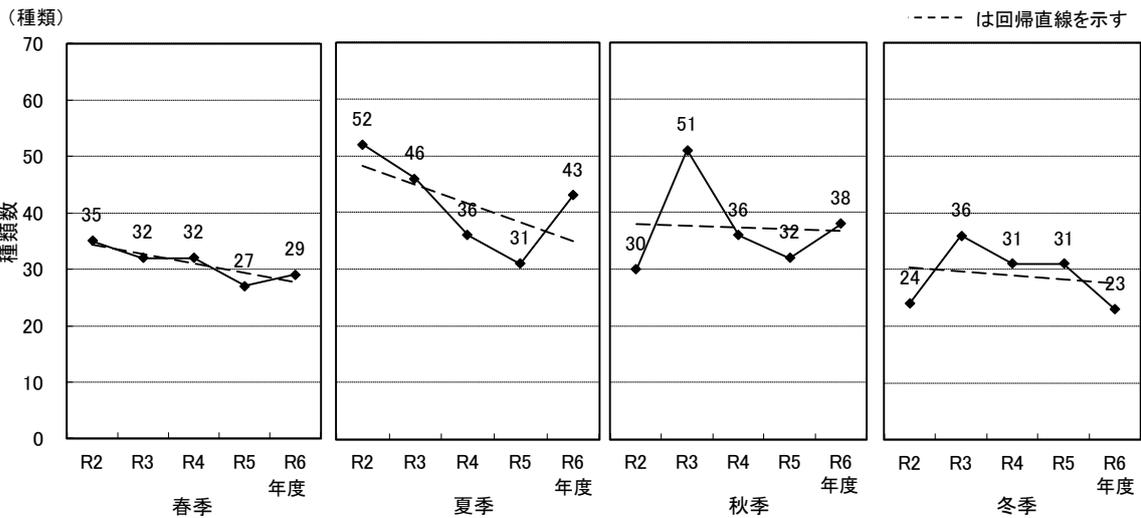
●地点④

地点④の直近5か年間における総出現種類数は、23～52種類の範囲であり、夏季で多かった。夏季は減少傾向、春季、秋季及び冬季は概ね横ばいであった。

個体数は、地点①、地点②と異なり、季節による個体数変化が小さかったが、経年変化をみると、春季と秋季はやや漸増傾向、夏季と冬季は概ね横ばいであった。

個体数からみた主な出現種に大きな変化はみられず、春季は魚類のヒイラギや棘皮動物門のスナヒトデ、夏季は棘皮動物門のスナヒトデや節足動物門のヘリトリコブシ、秋季及び冬季は節足動物門のトラエビ、ヘリトリコブシの出現が多かった。

【地点④】



【地点④】

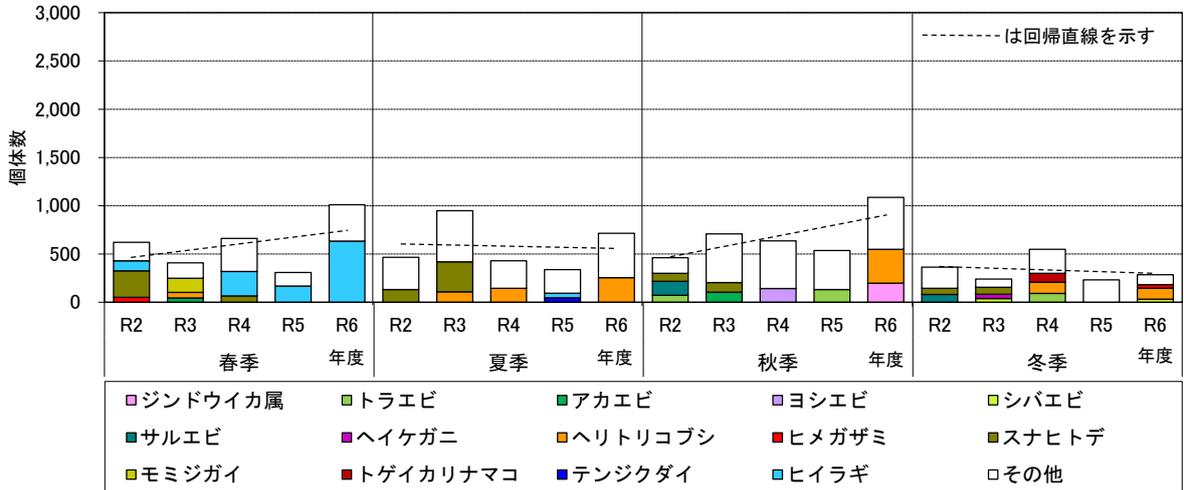


図 2.2.40(3) 魚介類の経年変化 (地点④)

2) 魚介類調査結果のまとめ

令和6年度の種類数は夏季にやや多く、個体数は春季及び秋季に多く、いずれも冬季に少なかった。個体数からみた主な出現種は、魚類のヒイラギ、節足動物門のヘリトリコブシ、シバエビ、軟体動物門のジンドウイカ属、棘皮動物門のスナヒトデ等であった。

令和2年度から令和6年度までの直近5か年間の個体数の変化傾向をみると、調査地点や調査年度による差がみられたが、春季と夏季は減少傾向にあり、特に夏季は全3地点で横ばい傾向であった。

個体数からみた主な出現種には、大きな変化はみられず春季は魚類のヒイラギや棘皮動物門のスナヒトデ、夏季から冬季にかけては、棘皮動物門のスナヒトデや節足動物門のヘリトリコブシとトラエビの出現が多かった。

埋立地周辺の魚介類の種類数、個体数については変動が大きいものの、環境の悪化を示す著しい変化（種類数、個体数の減少傾向の継続等）はみられず、事業による魚介類への影響は確認されなかった。

2.2.11 カブトガニ（周辺海域）

カブトガニ調査については、令和7年2月3日、6日、7日、10日、14日、15日に実施した。調査地点は、図 2.2.41に示したとおりである。

(1) 調査結果

カブトガニが確認された位置を図2.2.41に、採取したカブトガニの概要を表2.2.13に示す。



図 2.2.41 カブトガニ確認位置（令和6年度）

表 2.2.13(1) 採取したカブトガニの概要表

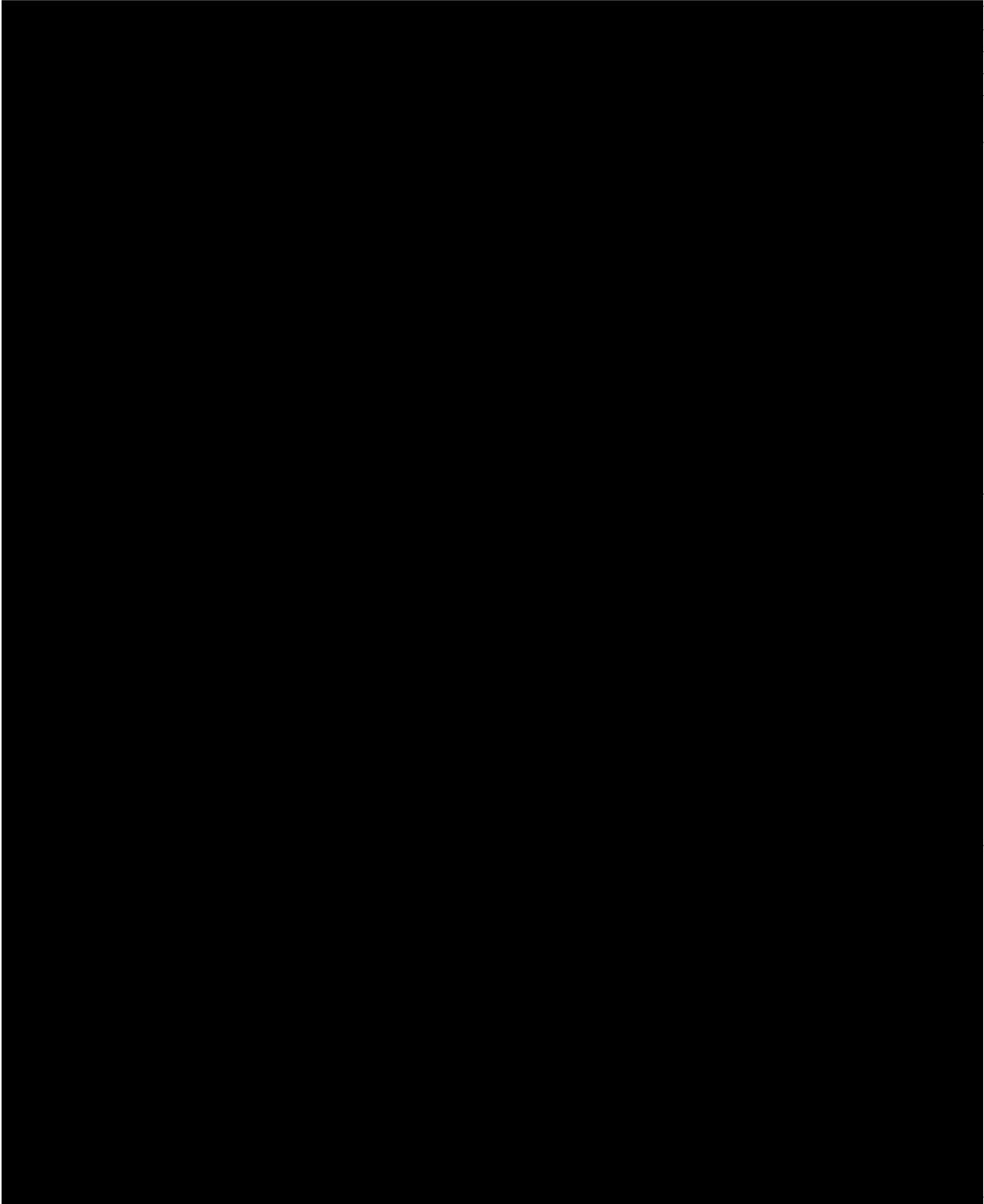
A large black rectangular area covering the majority of the page, indicating that the table content has been redacted.

表 2. 2. 13 (2) 採取したカブトガニの概要表

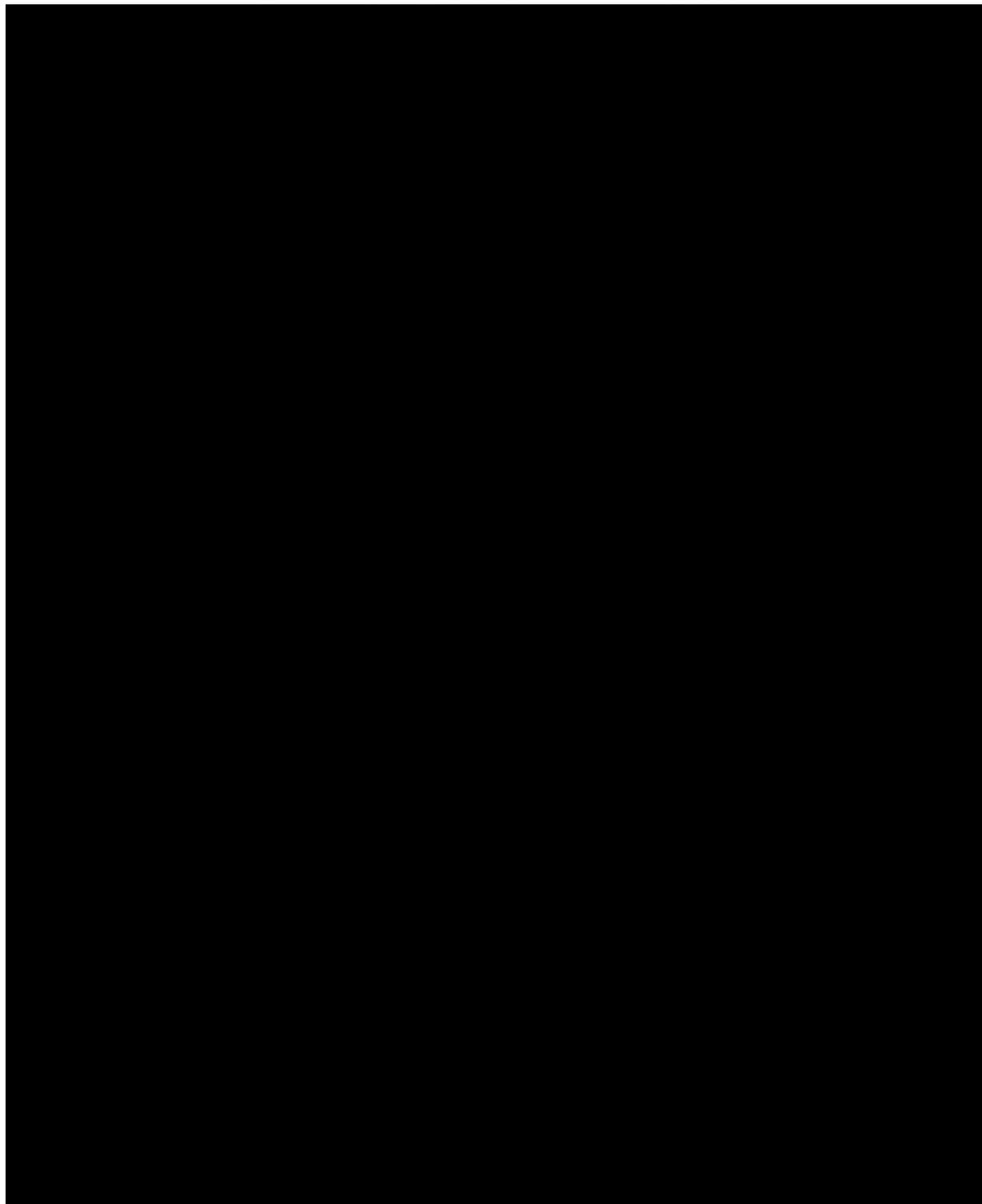


表 2.2.13(3) 採取したカブトガニの概要表

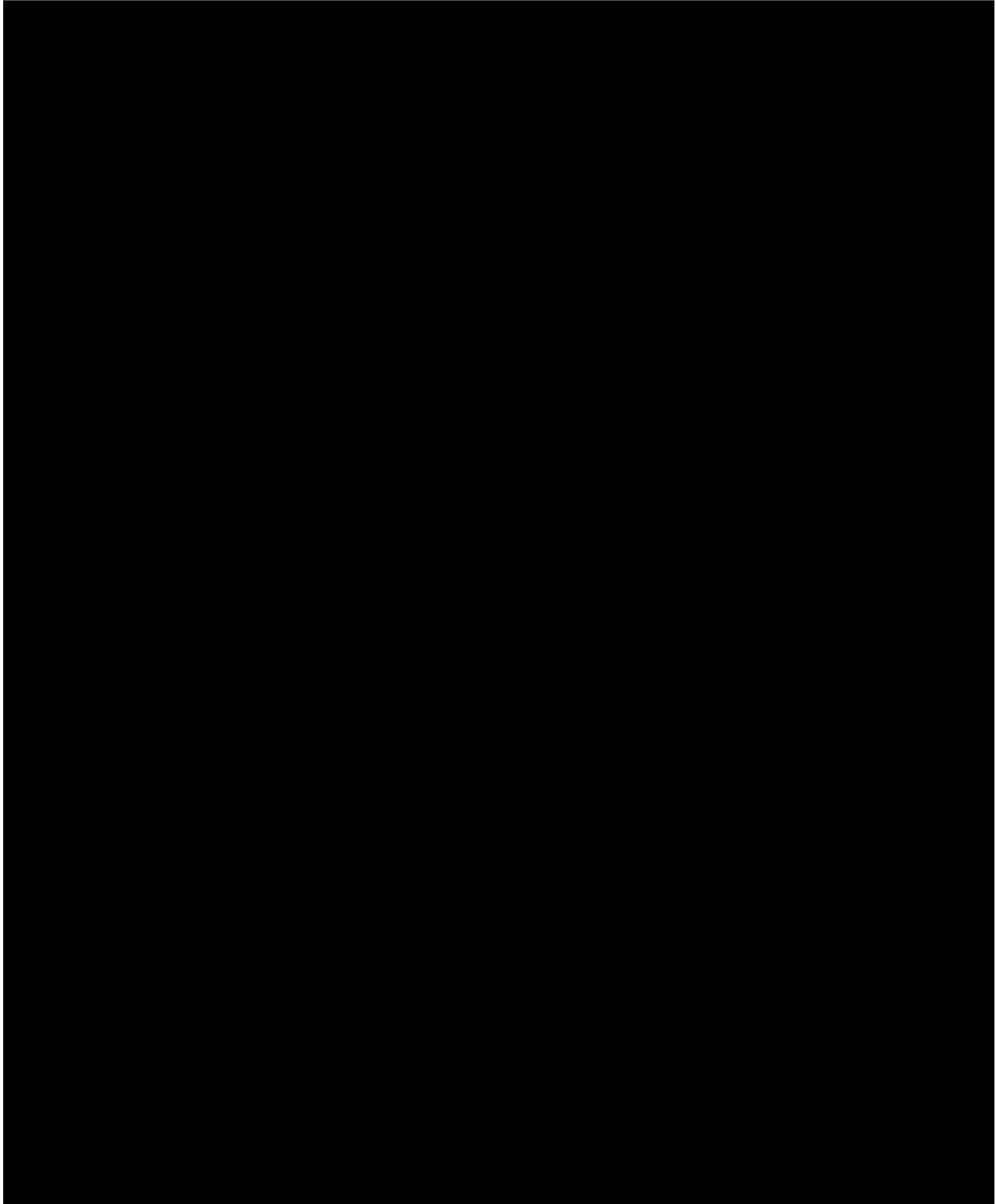
A large black rectangular area covering the majority of the page, indicating that the content of the table has been redacted.

表 2.2.13(4) 採取したカブトガニの概要表

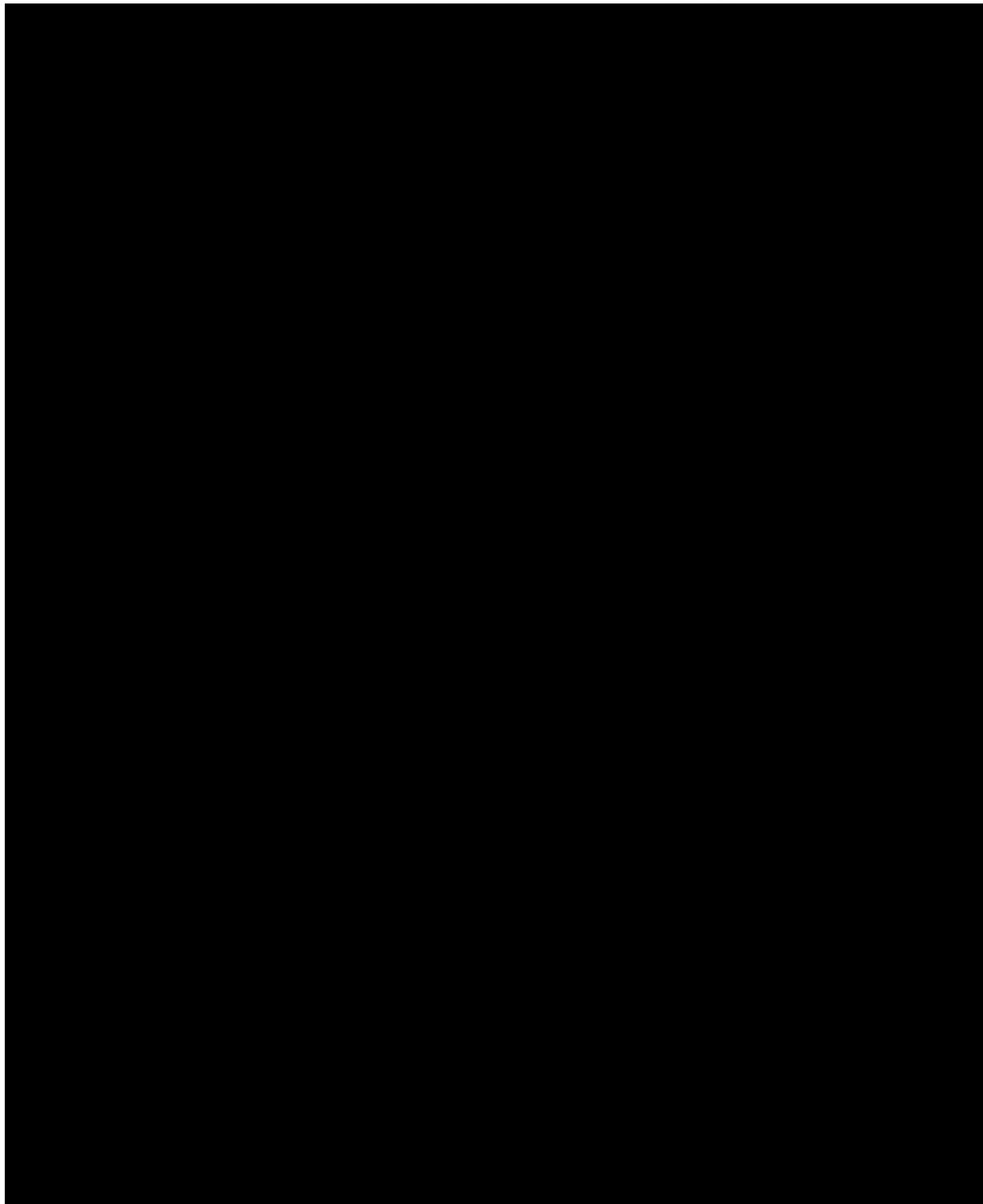
The table content is completely redacted with a solid black box, making it illegible.

表 2.2.13(5) 採取したカブトガニの概要表

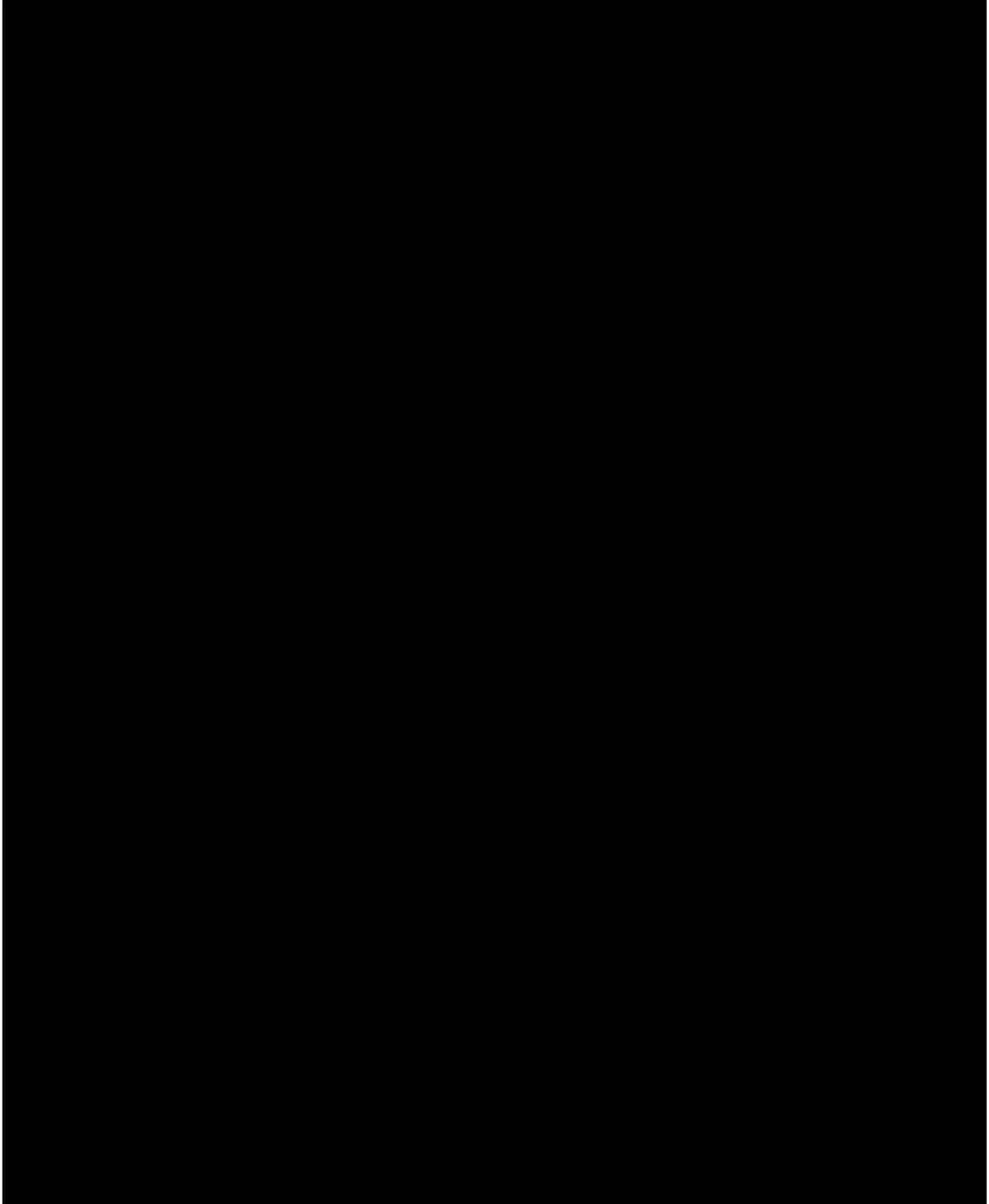


表 2.2.13(6) 採取したカブトガニの概要表

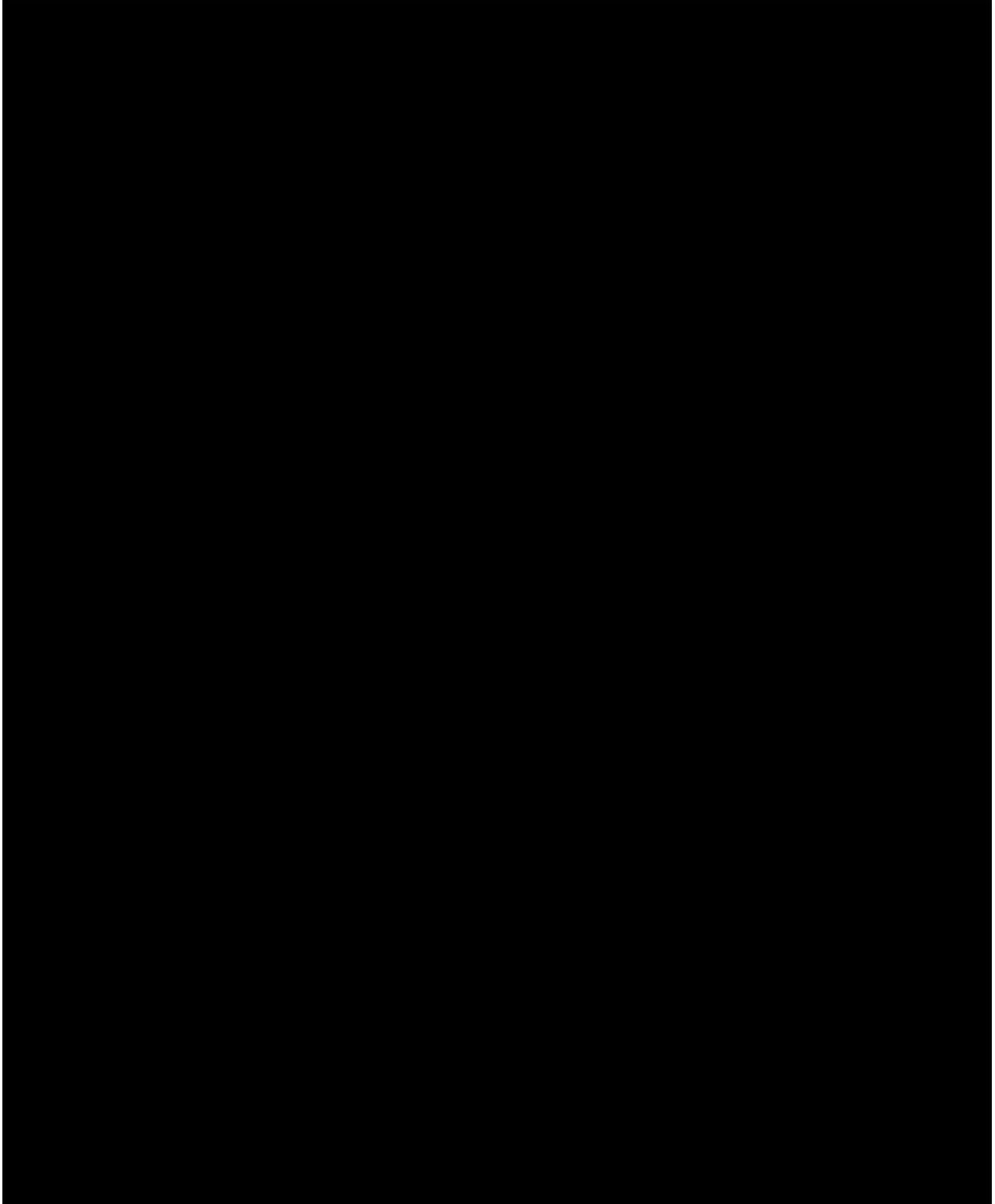
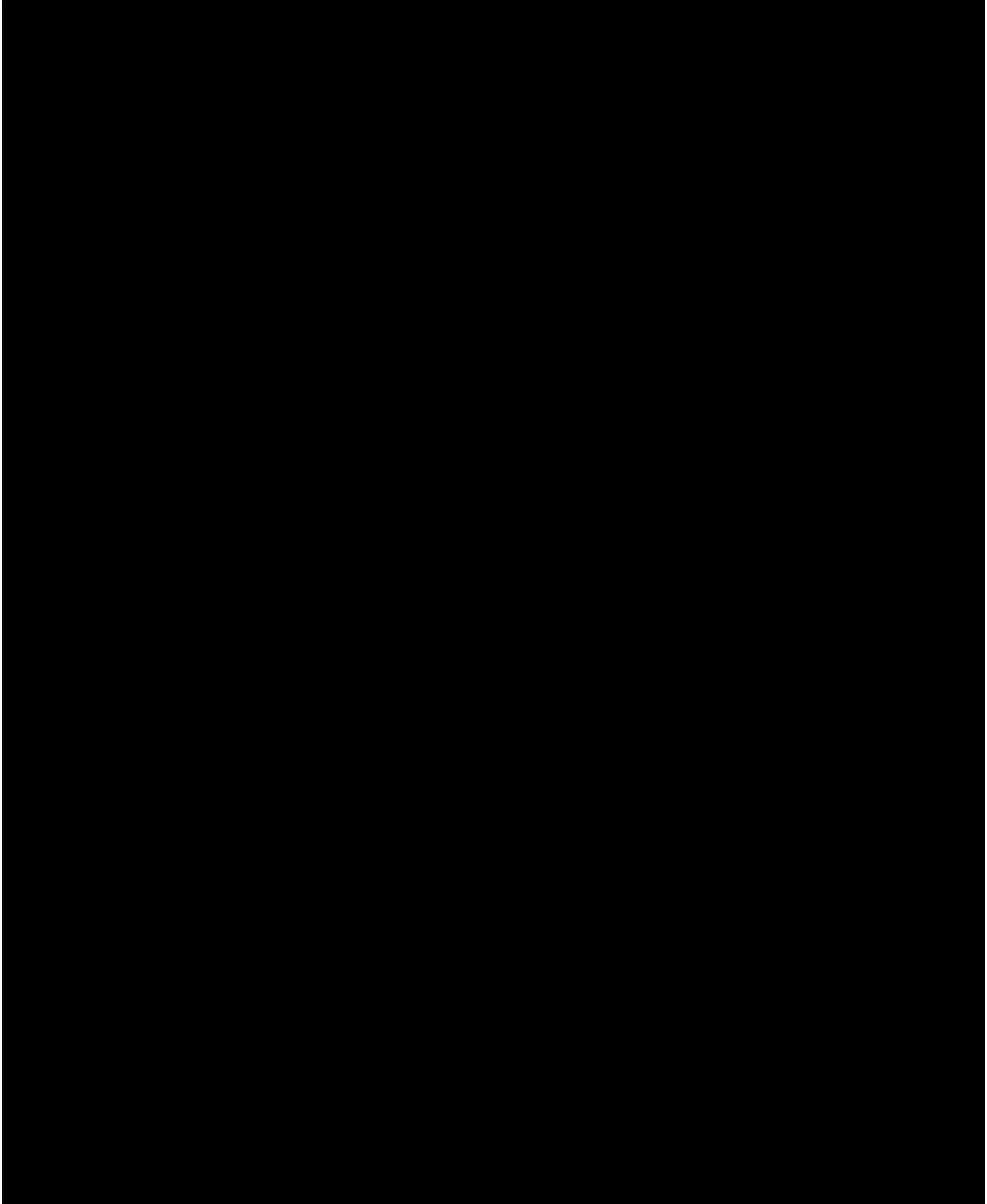


表 2.2.13(7) 採取したカブトガニの概要表



2.2.12 スナメリ

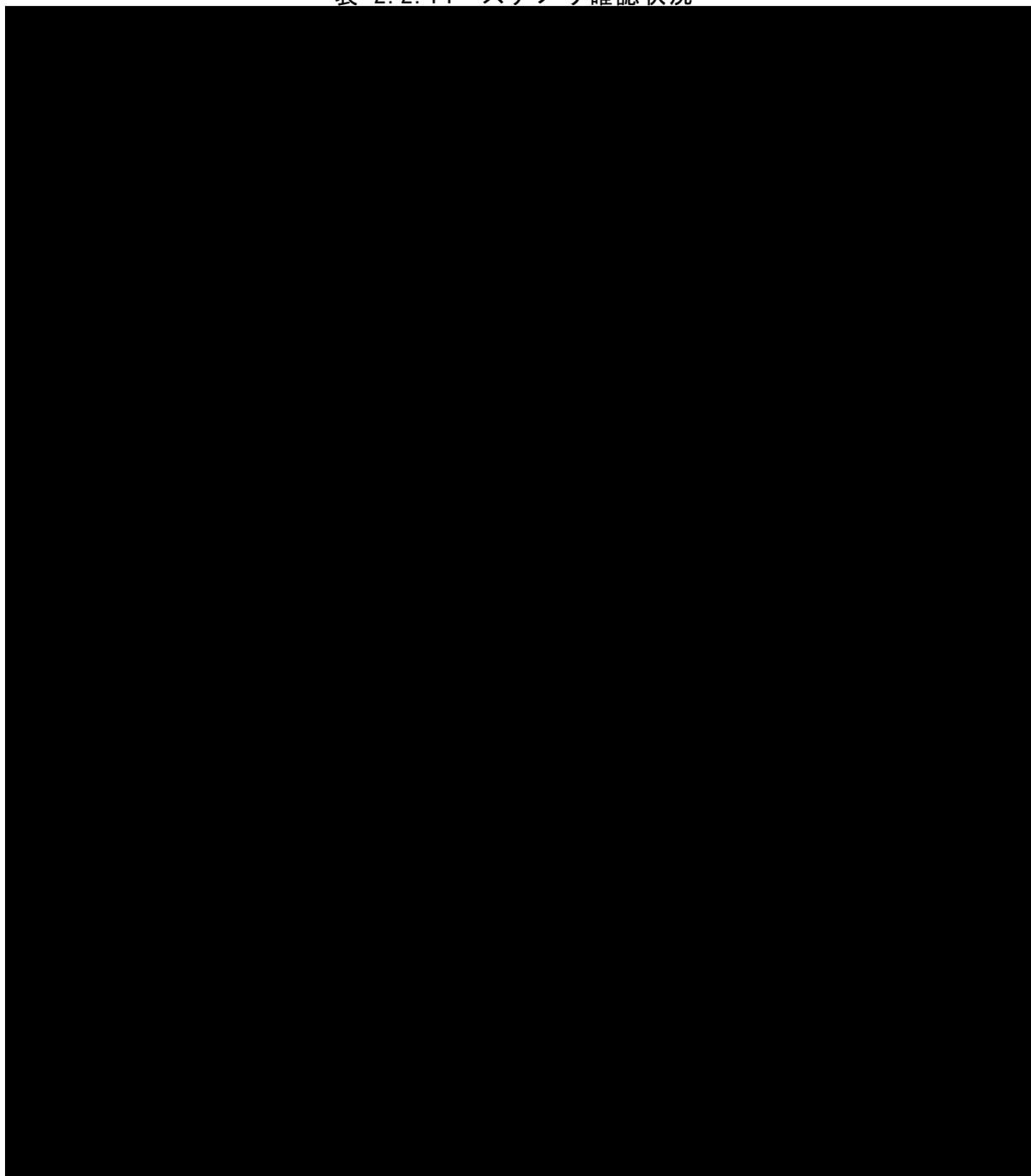
スナメリの船上からの目視観察（事業実施区域）は、水質調査時（水の濁り）に並行して実施し、スナメリのセスナ機による目視観察（広域エリア）は、令和6年5月25日に実施した。

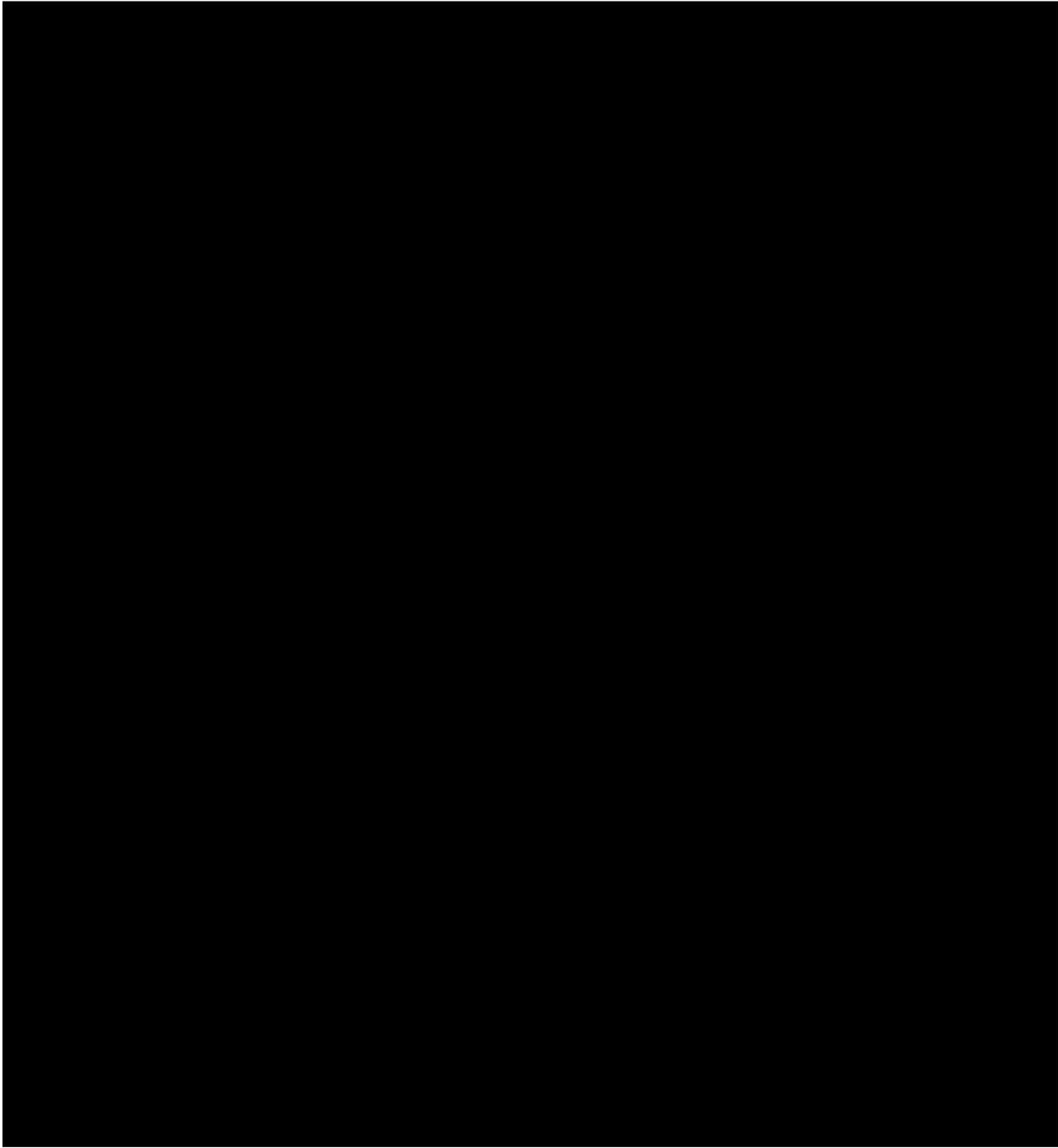
(1) 目視観察結果（事業実施区域）

目視観察の結果を表2.2.14、図2.2.42に示す。

水質調査時に実施した目視観察の結果、スナメリは空港島周辺、新門司港及び苅田港周辺を含めて合計19回、37箇所、のべ44頭が確認された。

表 2.2.14 スナメリ確認状況





※令和5年度新門司沖濁り監視調査：令和6年4月～10月
令和6年度新門司沖濁り監視調査：令和6年11月～令和7年3月

図 2.2.42 スナメリ確認地点図(船上からの目視観察)

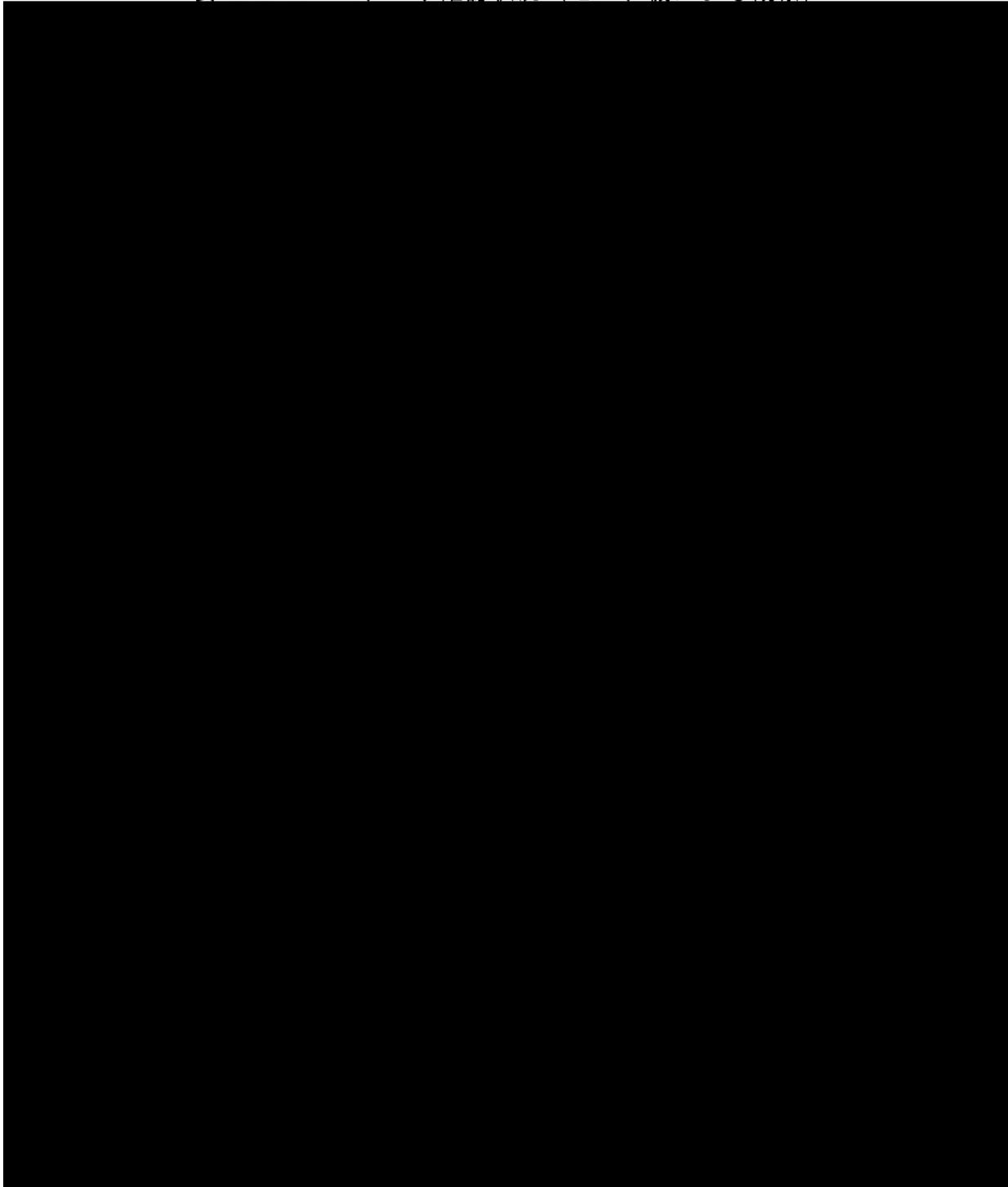
(2) セスナ機による観察結果（広域エリア）

セスナ機による観察結果を表2.2.15に、スナメリ確認地点を図2.2.43に示す。

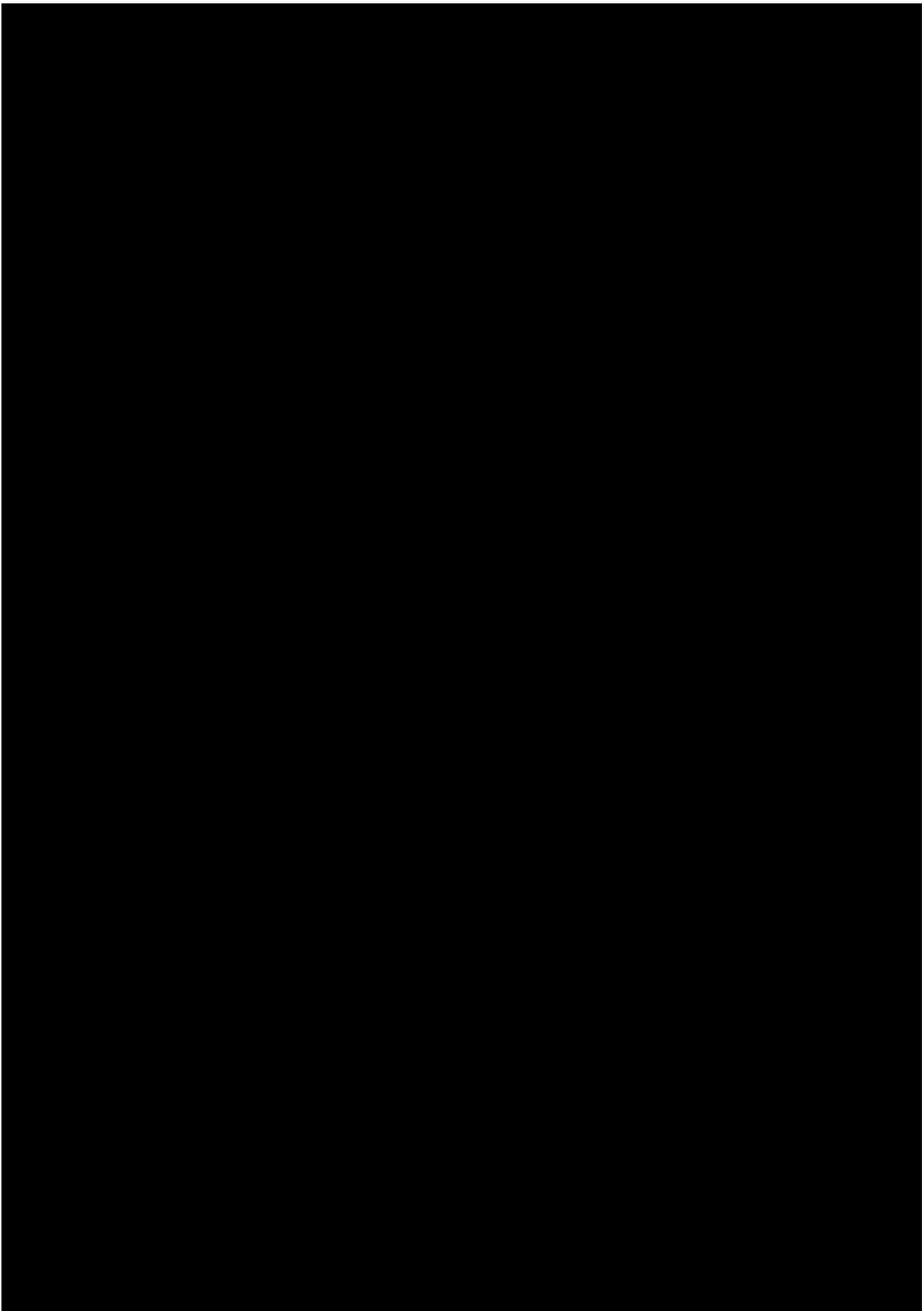
調査海域（調査測線）でスナメリが確認されたのは35箇所、のべ43個体（調査測線外の12番を除く）であった。なお、1箇所当たりの確認個体数は1～2個体であった。

スナメリは、空港島周辺の広い範囲で多数確認され、特に調査ラインのCで9箇所（10個体）、調査ラインDで5箇所（6個体）、調査ラインEで4箇所（6個体）と確認頻度が高かった。

表 2.2.15 スナメリ確認状況（セスナ機による観察）

The table content is completely redacted with a solid black box.

※詳細な確認位置は図 2.2.43 に示す確認地点番号と対応。



※確認番号は表 2.2.15 と対応

図 2.2.43 スナメリ確認地点